【漢検漢字文化研究奨励賞】佳作

漢字字体と慣用音

-「萌」の字音の変遷を例に-

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程・日本学術振興会特別研究員　大島　英之

一　はじめに

一・一　問題の所在

「萌」という字は、常用漢字には含まれていないが、「萌芽」という熟語の語形として、ホウという音読みが流通していると言えよう。しかし、中古音では明母[m（▽ mb）]に属する字であるため、日本漢字音の音形としては、マ行ないしバ行が期待される。またその韻母は、梗摂二等平声の耕韻[aŋ]に属し、歯音字以外では一般にア段＋ウ（呉音の一部はイ段＋ヤウ）が期待される。ただし、漢和辞典によって、呉音をミャウとするものとマウとするもの、漢音をマウとするものとバウとするものとが分かれており、どの認定が妥当なのかを、実例をもとに検証する必要がある。

また、現代語の「ホウ」の音は、声母の対応という点で例外的であり、多くの漢和辞典が共通して「慣用音」と認めるところとなっている。しかし、いつ頃から用いられ、どのようにして生じたのかは明らかでない。そこで、近世から近代にかけての字音の変化と、その原因について検証が必要であると考える。

一・二　本稿の構成

本稿は、「萌」の字について、中古中世（とくに鎌倉以前）における古訓点・古辞書にみえる実例に基づく帰納的な字音認定を行うとともに、現代に至るまでの諸資料に見られる音形を確認し、字音の変遷とその背景を追究するものである。

まず二節において問題点を整理したのち、三節では、呉音・漢音ともに音形はマウが一般的であること、室町時代には「萌」の「朋」からの類推で生じたと考えられるホウ・ボウの音も用いられるようになることを示す。四節では、近世以後は漢籍でモウ（マウ）が使用されなくなり、さらに近代では一般の漢語におけるボウの使用も減じることを示す。

五節では、近世に「モウ（マウ）」が使用されなくなる背景について、特に常用字でない場合、明母字の漢音を一律にバ行音とする動

きが近世初期に確認されることとの関連を指摘する。また、近代に「ボウ」が使用されなくなることについては、近代に至るまで「萠」の字体が使い続けられたことで、同じくボウ・ホウ二音からホウに一元化した「朋」と軌を一にする変化を遂げたものと解釈する。

以下、用例を引用する際には、下部を「明」に作る「萌」と、下部を「朋」に作る「萠」との二種の字体を区別して示し、字種として言及する際には混乱を避けるため《萌》と表記する。二種の字体の区別は、左下が《月》と書かれるか《日》と書かれるかを基準とし、「月」「㫃」「冂」などの違いは捨象して「萠」で示す。下部の《朋》を「冊」のように書く字体も見えたが、同様に「萠」で示す。一方、下部を《明》の異体字である「明」「朔」に作る字体は、それぞれ「萌」「䕫」で示す。なお、《萌》以外の字については、原則として通行の字体に改めて引用する。

使用したテキストや索引類については、稿末にまとめて示し、本文中では説明を多く省略した。用例の具体的な所在については、付記に示したリンク先を参照されたい。

二　問題点の整理

二・一　中古音の音注の整理

まず、論の前提となる、中古音資料における《萌》字の音注を整理しておく。

『広韻』では、下平十三・耕韻の甍小韻（莫耕切）の四番目に《萌》が見え、義注は「萌牙」とのみある。先行する『切韻』系韻書（『切三（S. 2071）』『王二（内府本刊謬補缺切韻）』『王三（全本王仁昫刊謬補缺切韻）』）でも、反切は同じである。

高山寺本『篆隷万象名義』には「麦耕反、萠芽也、本也」とあり、反切上字は『切韻』系韻書と異なるが、《莫》《麦》ともに明母字で変わりは無い。『宋本玉篇』の反切も同様である。

『玄応一切経音義』『慧琳一切経音義』の反切も、ほとんど「麦耕」か「莫耕」である[二]。『慧琳音義』に「麦彭反」が一例確認される〔巻八十・大唐内典録第十巻「毓萌」〕が、《彭》は耕韻と重韻の関係にある庚韻二等字であり、この二韻は『慧琳音義』の反映する秦音においては同音に帰していたとみられるから、問題とならない。

以上から、中古音は耕韻明母であることが確認される。

一方で、『広韻』甍小韻（莫耕切）の七字目の《萠》に、「爾雅云、存存萠萠、在也。又莫登切。本亦作萌。又作萠」という義注がある。「又莫登切」という反切が示す通り、《萠》は下平十七・登韻の菅小韻（武登切）にも掲出されており、「爾雅云、存存萠萠、在也」という同内容の義注がある。現行の『爾雅』テキストでは「存存萌萌、在也〈郭璞注：萌萌，未見所出〉」〔釈訓三〕とあり、『経典釈文』所収『爾雅音義』では「萌萌」について、「郭武耕反、施亡[三]朋反、字或作萠」〔中14ウ〕という二家（郭氏・施氏）の反切が示されている。このことから、登韻の《萠》はこの施氏音が根拠となっているものと考えられる。『集韻』では、登韻に《萌》を掲出し、義注に「爾雅、萌萌、在也。或作萠。俗作萠、非是」とある[四]。登韻は、日本漢字音ではオ段＋ウで反映されるため、演繹的には「モウ」や「ボウ」が期待されることとなる。

しかし、〈芽〉や〈きざす〉といった意味を表すのに用いられた、一般的な字音は、（規範的には）梗摂二等の耕韻のみであったと考えられる。以下に示すように、平安時代の日本の字書・音義類に、登

韻の音を反映するものは、管見の限り見られない。

・萌　莫耕反　芒也、本也、始也、須介〔天治本新撰字鏡・巻七２３オ〕

・群萌　莫耕反、慈恩云、芽也始也（以下略）〔醍醐寺本法華経釈文・中２２ウ〕

・萌蔚　ヰ（音）甍（以下略）〔観智院本類聚名義抄・僧上１９ウ〕

・萌　莫耕反キサス〔前田本色葉字類抄・下５９ウ〕

二・二　漢和辞典における呉音・漢音の整理

続いて、代表的、ないし、比較的近年に発売された漢和辞典における、《萌》の日本漢字音の取り扱いについて調査した（表１）。なお耕韻以外の音類を反映する音形は省略した。

表１　近現代の漢和辞典における《萌》の字音

書名	出版社	刊年	呉音	漢音	慣用音
漢和大字典	三省堂	1903	ミヤウ	バウ	−
大字典	啓成社	1917	ミヤウ	バウ	−
新修漢和大字典増補版	博文館	1936	ミヤウ	バウ	ハウ
大漢和辞典 九巻	大修館書店	1958	ミヤウ	バウ	ハウ
角川新字源	角川書店	1968	−	ボウ(バウ)	ホウ(ハウ)
学研漢和大字典	学研	1978	ミョウ(ミヤウ)	モウ(マウ)	ボウ(バウ)・ホウ(ハウ)
大漢和辞典修訂版 九巻	大修館書店	1985	ミヤウ	マウ	ハウ
角川大字源	角川書店	1992	−	ボウ(バウ)	ホウ(ハウ)
現代漢語例解辞典 2 版	小学館	2001	モウ(マウ)	ボウ(バウ)	ホウ(ハウ)
新漢語林 2 版	大修館書店	2011	ミョウ(ミヤウ)	モウ(マウ)	ボウ(バウ)・ホウ(ハウ)
新明解現代漢和辞典	三省堂	2012	モウ(マウ)	ボウ(バウ)	ホウ(ハウ)
岩波新漢語辞典 3 版	岩波書店	2014	−	モウ(マウ)	ホウ(ハウ)
五十音引き漢和辞典 2 版	三省堂	2014	モウ(マウ)	ボウ(バウ)	ホウ(ハウ)
全訳漢辞海 4 版	三省堂	2016	モウ(マウ)	ボウ(バウ)	ホウ(ハウ)
角川新字源改訂新版	角川書店	2017	−	ボウ(バウ) モウ(マウ)	ホウ
漢字源改訂 6 版	学研	2018	ミョウ(ミヤウ)	モウ(マウ)	ボウ(バウ)・ホウ(ハウ)

現代通行音の「ホウ」を慣用音とするのは、全ての辞書に共通するが、呉音・漢音の判断は一定していない。呉音・漢音双方の音形を掲げる辞書において、これらを整理すると、①～③となる。

①呉音ミャウ／漢音バウ…漢和大字典、大字典、大漢和辞典など
②呉音ミャウ／漢音マウ…学研漢和大字典、大漢和辞典修訂版など
③呉音マウ／漢音バウ……現代漢語例解辞典、五十音引き漢和辞典、漢辞海など

①は、文雄『磨光韻鏡』や大矢透『隋唐音図』といった、等韻学に基づいた演繹的な字音認定の結果と一致する。②は、三・二節で後述する有坂（一九四〇）の研究を踏まえた判断と思われる。③は、日本語資料に実際に確認できる音形を積極的に採用する方針の辞典類に、多く共通して見られる。ただし、同様の方針が凡例に示される『角川新字源 改訂新版』は、漢音にマウ・バウ二音を認め、呉音形は掲げていない[五]。

以上を踏まえ、三節・四節で、日本語資料中に見られる音形を確認する。

三　中古・中世における《萌》の字音

三・一　中古中世の呉音資料における《萌》の字音

まず、中古中世の仏典・音義類から、《萌》の呉音形を確認する。

『妙法蓮華経』には、人民を意味する「群萌」という熟語が二例見える。そこで代表的な法華経音義をみると、「萌（去）无香反」〔九条家本法華経音〕、「萌（キサム）（上）マウ／无（去）香（上）」〔保延本法華経単字〕、「萌（マウ）（上）キサス」〔法華経音訓（至徳版）〕のように、音形はマウ、声調は上～去声で現れる。仮名書き法華経でも、足利本・妙一記念館本ともに「くんまう」であり、妙一記念館本の巻六には「群（去濁）萌（まう）（上）」の差声も確認される。

観智院本『類聚名義抄』には、「萌𦬊（音）ヰ甍 キサス（○上濁平） モユ（平上） 禾（和）マウ（平上）」〔僧上１９ウ〕とある。「マウ」には上昇調を示す墨声点が施されており、去声と考えられる。

他の仏書の例としては、高山寺本『大日経疏』巻二に「善萌（マウ）」「萌（マウ）動」といった墨筆の加点例がある。墨筆には二種ある（築島一九八六）が、「ウ」の仮名字体から判断するに長治元（一一〇四）年の点かと思われる。また、高山寺本『新訳華厳経』寛喜元（一二二九）年点にも、《萌》に「マウ」の加点があるようである（榎木一九九八）。

親鸞遺文では、建長七（一二五五）年の書写と伝えられる法雲寺本『尊号真像銘文』（略本）に「群（クン）（去濁）萌（マウ）（上）」とある[六]。正嘉二（一二五八）年の書写奥書を持つ専修寺本（広本）にも「クンマウ」の仮名音注が見える。訓点資料である板東本『教行信証』には「羣萌」３例「群萌」２例あり、いずれも《群》に去声の濁声点、《萌》に上声の単声点が施されている[七]。

以上から、中古中世における《萌》の呉音形は、マウが基本であり、中古音の平声に対し、仄声で実現していたことが確認される。

なお、小倉（一九九五）によれば、山田本甲・承応版などの法華経音義には、《萌》に対して「ホウ」ないし「ボウ」とあるようだが、これらは近世初期のものとされる。また、室町末の書写とされる龍谷大学図書館蔵『浄土三部経音義』にも「萌（ホウ）（キサス）（モユ）」が確認されるが、当該資料については「粗雑ないし不用意な仮名音注が散見され、ま

た漢音形の混入も多い」という指摘がある（石山二〇二一：五五）。天正十八（一五九〇）年の序文を有する珠光編『浄土三部経音義』には、「萌（バウ）（マウ音）キザス　モユル」とあり、「～音」は呉音形を表すとみられる（石山二〇二一：五〇）ことから、中世末にも呉音がマウと意識されていたことが分かる。

三・二　中古中世の漢音資料における《萌》の字音

続いて、中古中世の漢音資料から、《萌》の漢音形を確認する。

《萌》の漢音形に関する言及は、つとに有坂（一九四〇）に見られる。有坂（一九四〇）は、明母・泥母のうち撥音韻尾を有する字では、漢音資料にマ・ナ行が現れる事実を指摘し、それが、蔵漢対音資料や善無畏の梵語音訳などにも観察されるところの、鼻音韻尾の影響により脱鼻音化が抑制されるという、唐代長安方言の音声的特徴を反映したものであることを論じた。この事実の主要な根拠となっているのは、正倉院本『蒙求』の仮名音注であり、「門（モン）・孟（マウ）・命（メイ）・明（メイ）・鳴（メイ）」と共に「萌（マウ）」が挙げられている。

これに対し築島（一九六七：二二九）は、興福寺本『大慈恩寺三蔵法師伝』承徳点では「鼻音で終る字音の中でも、明母にバ行表記のものが存するのであり、……必ずしも有坂博士の述べられたやうに規則的にはなつてゐない。この點尚考究する餘地がありさうである。」として、「妄（バウ）・罔（バウ）・網（バウ）・挽（ベン）・冕（ベン）・晩（バン）・敏（ビン）」と共に「萌（バウ）」が挙げられている[八]。

以上より、マウ・バウともに平安鎌倉時代の漢音資料に実例があることは認められるが、どちらの音形がより一般的であったか（もしくは両形とも一般的であったか）を考えるにあたっては、多くの資料から用例を集めた上、帰納的に判断する必要がある。そこで、中世以前の訓点本が存在し、かつ、漢音の使用が期待される文献として、以下を選定し、《萌》の用例を検索した[九]。

○漢籍
【経部】周易（王弼注），尚書（孔安国伝），毛詩鄭箋，礼記（鄭玄注），春秋経伝集解，古文孝経（孔安国伝），論語集解，孟子（趙岐注），千字文（李暹注）／【史部】史記，漢書，貞観政要／【子部】帝範，臣軌，六韜，黄石公三略，五行大義，群書治要，蒙求（古注・徐注），遊仙窟，老子道徳経（河上公注），荘子（郭象注）／【集部】白氏文集，文選（李善注）
○仏書
【仏典】孔雀経，理趣経／【伝記類】大慈恩寺三蔵法師伝，大唐西域記，南海寄帰内法伝
○日本漢文
【空海関連資料】文鏡秘府論，三教指帰，遍照発揮性霊集，秘密曼荼羅十住心論，秘蔵宝鑰／【詩文集】和漢朗詠集，新撰朗詠集／【文例集】本朝文粋／【古往来】和泉往来，高山寺本古往来／【軍記・説話】将門記，注好選，探要法華験記／【古文書】尾張国郡司百姓等解文
○漢籍引用文献
【和製類書】明文抄，玉函秘抄，管蠡抄／【古辞書】文明本節用集（態芸門所収漢籍引用部分）／【古注釈】源氏奥入

得られた用例のうち、一四世紀以前と思われる仮名音注・声点加

点例を、表２に年代順に示す[一〇]。

表２凡例

・加点時が明らかである文献についてはその加点年を西暦で示し、推定による場合は＊を付した。

・書写・加点識語のない文献の加点年代の判断については、小林（一九六七：一六一～一九六）、築島（二〇〇八）、佐々木（二〇〇九：六一七～六二五）や、各種解題などに従った[一一]。

・排列の便宜上、院政後期は一一五〇年、院政末期は一一八〇年、鎌倉初期は一二〇〇年、鎌倉中期は一二五〇年、鎌倉中後期は一二八〇年、鎌倉後期は一三〇〇年、鎌倉末期は一三三〇年、南北朝期は一三六〇年とした。ただし、より幅の狭い年代推定がなされている資料については、その推定年代に従った。

・一四世紀以前と思われるが、加点時の判断が難しい例については、便宜上最後にまとめて示した。

・先論によって室町以後の別筆とされているものや、その蓋然性が高いと判断した例は除いたが、判断に迷い含めた例もある。

・改行は「／」、合点は「〻」で示した。左右両方に別の字音がある場合は、左をL、右をRとして示した。

・「字体」列には、影印などによって確認できたもののみ示し、活字に拠ったものは「-」とした。

・「出典」列には、調査資料名を略記し、インターネット上で公開されている画像を利用した場合はウェブサイト名を略記した。

・用例の所在については、本稿末尾のリンク先（Google スプレッドシート）を参照されたい。

表２　一四世紀以前加点の日本漢音資料における《萌》の漢字音

	字体	字音	声点	漢語	資料名	加点年
1	萌	マウ	平	逢萌	長承本『蒙求』朱点	*950
2	萌		去	萌漸	天理本『南海寄帰内法伝』平安後期点	*1020
3	萌		平	萌蔕	興福寺本『大慈恩寺三蔵法師伝』承徳三年墨点	1099
4	萌	ハウ		萌蔕	興福寺本『大慈恩寺三蔵法師伝』承徳三年朱点	1099
5	萌	ハウ	平	黎萌	興福寺本『大慈恩寺三蔵法師伝』承徳三年墨点	1099
6	萌	(濁点)		黎萌	興福寺本『大慈恩寺三蔵法師伝』承徳三年朱点	1099
7	萌	マウ	平	餘萌	『管見記』紙背『文選』巻二院政初期角筆点	*1100
8	萌	マウ	去	萌兆	高山寺本『秘密曼荼羅十住心論』天永二年朱点	1111
9	萌		去	善萌	高山寺本『秘密曼荼羅十住心論』天永二年朱点	1111
10	萌		平	萌兆	大谷大学本『三教指帰集注』長承二年点	1133
11	萌	マウ		逢萌	長承本『蒙求』長承三年墨点	1134
12	萌	マウ		萌蘭	書陵部本『文鏡秘府論』保延四年朱点	1138
13	萌	マウ	平	逢萌	故宮博物館本『蒙求』院政後期点	*1150
14	-	マウ		萌兆	天理図書館本『三教指帰』久寿二年点	1155
15	萌	マウ	去	萌動	東大国語研究室本『秘蔵宝鑰』仁安七年点	1167
16	萌	マウ		萌動	西教寺本『秘蔵宝鑰』院政末期点	*1180

17	萠	マウ	平	萌黎	高山寺本『史記』周本紀鎌倉初期点	*1200
18	-	マウ	平	萌兆	仁和寺本『三教指帰』鎌倉初期点	*1200
19	萠		平濁①		人文研本『大慈恩寺三蔵法師伝』承元四年朱点	1210
20	萠	ハウ		萌薈	人文研本『大慈恩寺三蔵法師伝』貞応二年墨点	1223
21	萠	=②ウ		未萌	人文研本『大唐西域記』貞応二年頃点	*1223
22	萠	マウ	平	萌草	大東急記念文庫本『白氏文集』嘉禎四年写本	*1238
23	萠	マウ		萌兆	光明院本『三教指帰』鎌倉中期頃朱点	*1250
24	萠	ホウ R マウ L③	去	萌兆	龍門文庫本『三教指帰』鎌倉中期頃墨点	*1250
25	萠	マウ		逢萌	正倉院本『蒙求』鎌倉中期点	*1250
26	萠		平	萌幼	書陵部本『群書治要』巻七(礼記)康元二年点	1257
27	萠	マウ	平	民萌	書陵部本『群書治要』巻三三(晏子)文応頃点	*1260
28	萠		平	萌牙	書陵部本『群書治要』巻三四(老子)文応頃点	*1260
29	萠	マウ	平	萌生	書陵部本『群書治要』巻三五(文子)文応頃点	*1260
30	萠		平	萌生	書陵部本『群書治要』巻四二(塩鉄論)文応頃点	*1260
31	萠	マウ		萌	書陵部本『群書治要』巻四五(崔寔政論)文応頃点	*1260
32	萠		平	萌	書陵部本『群書治要』巻四七(政要論)文応頃点	*1260
33	萠		平	餘萌	久遠寺本『本朝文粋』鎌倉中期点	*1276
34	萠	マウ	平	萌芽	久遠寺本『本朝文粋』鎌倉中期点	*1276
35	萠	マウ	平	逢萌	東洋文庫本『蒙求』鎌倉中後期点	*1280
36	萌	マウ	平	萌草	天理図書館本『白氏文集』正応二年点	1289
37	萠	マウ		萌	『管見抄』(『白氏文集』抄出）永仁頃点	*1295
38	萠	ホウ／ ^マウ		萌生	書陵部本『臣軌』鎌倉後期点	*1300
39	萠		平	萌牙	書陵部本『臣軌』鎌倉後期点	*1300
40	萠	マウ		萌蘭	成簣堂文庫本『文鏡秘府論』鎌倉後期点	*1300
41	萠		平	萌	書陵部本『群書治要』巻三十「晋書」嘉元四年点	1306
42	-	マウ		萌	金沢文庫本『管蠡抄』徳治三年写本	*1308
43	-		平	未萌	金沢文庫本『管蠡抄』徳治三年写本	*1308
44	-	マウ		萌	知恩院本『三略』正和二年点	1313
45	萠	ニ④ウ	平	萌草	『白氏文集』正和頃点	*1313
46	-	マウ	平	逢萌	天理図書館蔵『蒙求』道順書写本鎌倉末期点	*1330
47	萠	マウ		萌芽	天理図書館蔵『文選』巻二十六元徳二年点	1330
48	萠	マウ		民萌	天理図書館蔵『文選』巻二十六元徳二年点	1330
49	萌	マウ R ^ホウ L⑤	平	萌兆	穂久邇文庫本『五行大義』元弘三年写本	*1333
50	萌	ホウ	平	萌牙	穂久邇文庫本『五行大義』元弘三年写本	*1333
51	萌	ホウ		孳萌	穂久邇文庫本『五行大義』元弘三年写本	*1333
52	萠	マウ	平	萌牙	穂久邇文庫本『五行大義』元弘三年写本	*1333

53	萠		平	萌牙	穂久邇文庫本『五行大義』元弘三年写本	*1333
54	萠	マウ	平	逢萌	天理図書館蔵『蒙求』康永四年点	1345
55	萠		平	萌草	猿投神社本『白氏文集』文和二年写本	1353
56	萠		去	萌動	真福寺蔵『秘蔵宝鑰』応安三年写本	*1370
57	萠		平	萌牙	梅沢本『老子道徳経』応安六年写本	*1373
58	萠	マウ	平	未萌	梅沢本『老子道徳経』応安六年写本	*1373
59	萌	マウ	平	逢萌	国会図書館蔵『蒙求』増注本応安七年刊本書入れ	*1374
60	萠	マウ		萌蘖	書陵部本『孟子集註』弘和元年点	1381
61	萠	マウ	平	萌牙	書陵部本『老子道徳経』至徳三年点	1386
62	萠	マウ		未萌	書陵部本『老子道徳経』至徳三年点	1386
63	萠	マウ		逢萌	大橋家本『源氏物語奥入』	?

※表内注

①「△」の形の点。濁声点と解する。

②**=**は、「へ」の右側に「ノ」が重なったような字体であり、判読不能。

③左傍訓「マウ」は、後筆か。

④「ニ」は「マ」の誤りか。

⑤左傍訓「ホウ」は、後筆か。

表2によれば、音形はマウが大多数を占め、ハ（バ）ウは興福寺本・人文研本の『大慈恩寺三蔵法師伝』（4 5 6 19 20）にしか見えない。また声点は、『南海寄帰内法伝』（2）と空海関連資料（8 9 15 24 56）に去声点が若干見られる[一二]ものの、典型的な漢籍では平声点に限られている。よって、平安鎌倉時代においては、《萌》の一般的な漢音形は、マウ・平声であったと推測される。このことから、単声点のみが差された例も、多くはマウを示したものと解される。

また、中古音で《萌》と同音である耕韻明母の《甍》《氓》《甿》といった諸字や、後期中古音で耕韻と合流していたとされる庚韻二等明母の《盲》《猛》《孟》といった諸字についても、平安鎌倉期の漢音資料に「マウ」の音注が確認される[一三]。すなわち、耕韻・庚韻二等の明母字も、他の陽声韻と同様に、脱鼻音化が抑制された発音が伝わっていたものと思われる[一四]。

そして、龍門文庫本『三教指帰』（24）、書陵部本『臣軌』（38）、穂久邇文庫本『五行大義』（49～51）などに、「ホウ」という音形が見られることが注目される。オ段長音の開合の混乱によるハ（バ）ウの合音形と解するには時期が早すぎる上に、このような位相にある資料群に混乱例が現れることは想定しがたく、また諸資料に「モウ」が全く見えない点も説明できない。一方で、二・一節末に述べた〈在る〉という字義の登韻の字音に由来することも、考えがたい。

室町時代の漢籍では、マウも依然として用いられ続けるが、マウ以外の音形も散見されるようになる。以下に、今回の調査で得られた、《萌》字に対するマウ以外の音形のうち、室町以前と思われる例を掲げる。なお表2にも示したものについては、用例番号を先頭に付した。

○ホウ・ボウの例

・『孟子』告子章句上「雨露之所潤、非無萌蘖之生焉」一五

萌（平）-孽（入濁）（五韵反）〔京都大学附属図書館蔵清原宣賢点〕

萌（ヘマウ／ホウ）-蘖（ケツ）〔東洋文庫蔵室町後期写有注本〕

※書陵部蔵集註本、東洋文庫蔵永禄十年写本などは「マウ」

・『臣軌』守道章「禍福萌生、終身不悟、此由於不知道也」

38 萌（ホウ／ヘマウ）-生（シ 江天シ点）〔書陵部本鎌倉後期点〕※マウ後筆か

・『六韜』龍韜・王翼第十八「主図安危、慮未萌」

未萌（ミホウ）〔陽明文庫蔵天文二十四年写本〕

未-萌（ホウ）〔慶應義塾大学図書館蔵室町後期写本〕

未萌（ヒホウ）〔京都大学附属図書館蔵清原業賢筆本〕

未萌（ホウ）（ボウヘサル）〔斯道文庫蔵天正十二年写本（091/ト418/2）〕

未-萌（ビボウ）（キサス）〔斯道文庫蔵室町時代写本（091/ト83/1）〕※濁点は圏点

・『五行大義』序「靡究萌兆」

49 萌（マウ）（平）-兆（テウ）（去）〔穂久邇文庫蔵元弘三年写本〕

・『五行大義』巻一「揆然萌牙於物也」

50 萌（ホウ）（平）-牙（カス）（平）（キサス）〔穂久邇文庫蔵元弘三年写本〕

・『五行大義』巻一「萬物孳萌」

51 孳（シ）（平）-萌（ホウス）〔穂久邇文庫蔵元弘三年写本〕

・『蒙求』「逢萌挂冠」一六

蓬萌掛冠〔国会図書館蔵大永五年写本〕※角筆点モウあり

逢萌（ホウボウクハ）掛冠〔東京大学附属図書館南葵文庫蔵天文四年写本〕

※龍谷大学本、内閣文庫本、京大天正八年本、京大徐注本などは「マウ」

・『三教指帰』巻上「麻畝直性、亦未萌兆」

24 萌（ホウ）（去？）（マウ）兆（テウ）（去？）〔龍門文庫蔵鎌倉初期写本同時期頃点〕

※マウ後筆か

・『管蠡抄』「整政責躬、杜漸防萌、則凶妖消滅、禍除福湊矣」

萌（ホウ）〔国会図書館蔵室町末期写本〕※ホの左上に二点あり、濁点か

○ハウ・バウの例

・『大慈恩寺三蔵法師伝』巻八「是以萌蕃疇昔、神光聊見於曩時」

3 4 萌（はう）（平）蕃（てい）（去）〔興福寺本承徳三年点〕※朱点は平仮名で示す

20 萌籌（ハウてい）（去）〔人文研本貞応二年墨点〕※朱点は平仮名で示す

・『大慈恩寺三蔵法師伝』巻九「福善之業濯沐黎萌」

5 6 黎（レイ）（平）萌（ハウ）（平）〔興福寺本承徳三年墨点〕※ハに朱濁点あり

・『六韜』龍韜・王翼第十八「主図安危、慮未萌」

未-萌（ハウ）〔斯道文庫蔵首欠本（091/ト402/2）〕

・『孟子』告子章句上「雨露之所潤、非無萌蘖之生焉」

萌（バウ）（平）-蘖（ゲツ）〔龍谷大学蔵『孟子集註大全』室町末期写本〕

・『後漢書』丁鴻伝「若勅政責躬、杜漸防萌、則凶妖銷滅、害除福湊矣」

萌（ハウ）〔文明本節用集朱筆訓〕

○モウの例

・『蒙求』「逢萌挂冠」

蓬萌（モウ）掛冠〔国会図書館蔵大永五年写本角筆点〕

以上の例は、いずれも〈きざす〉〈めばえる〉〈民（＝《氓》に通じる用法）〉といった意味であって、中古音の耕韻の字義と対応する。やはり、登韻の音が敢えて持ち出される理由は想定しがたい。

また、上に挙げた資料にはオ段長音の開合の混乱状況を示すものもあるが、「マウ」が依然として用いられるにも拘わらず、『蒙求』大永本角筆点を除き「モウ」が見えない[一七]ことは、音声上の混乱だけでは説明しがたい。

ここで注目したいのが、《萌》の字体である。これまでに示した用例のうち、字体を「萌」「萌」に作る例は少数にとどまり、圧倒的多数は下部を《朋》に作る「萠」であった。《朋》は平声登韻並母字で、呉音ボウ・漢音ホウである。そのため、《萌》字を、《朋》を声符とする形声字と誤認し、類推（いわゆる百姓読み）によってホウ・ボウという慣用音が散発的に生じ、またそれが伝承されることも、しばしばあったのではないかと考察する[一八]。

また、上に挙げた資料の多くには、濁声点ないし濁点の使用が、義務的に施しているとは言いがたいものの、認められる。それにもかかわらず、《萌》に対する濁声点・濁点の加点例は少ない。不濁点や清音注記といった、清音であったことを示す積極的な証拠は現在のところ見出せていないが、「ホウ」の例が《朋》からの類推によるものだとすれば、清音形ホウも中世には既に生じていた可能性が高いであろう。

もし《萌》の漢音として、古くバウが一般的に用いられたとすると、漢籍に濁声点のみを加点することも多かったはずである。その場合、その濁声点を目にした後代の人が、《萌》の字を音読みする必要に迫られた時、朋（ボウ）という呉音形を持ち出すことには、（連声濁を起こす環境でない限りは）抵抗があったのではないかと想像される。しかし、既に見たように実際にはマウが一般的であり、単声点のみの加点も多かった。この事実も、一つの阻害要因が回避されたという点で、萌（ホウ）という音形が発生・定着するのに有利に働いたのではないかと思われる。

三・三　中古中世の辞書・非漢文資料における《萌》の字音

前節までにおいて、平安鎌倉時代においては、呉音・漢音ともに「マウ」が多く、声調において対立があったことを確認した。しかし、一部の漢音資料に「ハウ」や「ホウ」が確認され、また室町時代に降ると「ホウ」が多くの資料に現れるようになることを確認した。そこで、本節では、呉音漢音の区別に関する規範性が相対的に低いと思われる、古辞書や非漢文体の日本語文資料に見られる《萌》の字音を調査して整理し、当時の一般的な音形を探っていく。

まず、中世の古辞書類を確認する。

『色葉字類抄』（前田本・黒川本）と『下学集』（古本七種・元和本）には、《萌》を音読する語は確認できない。『節用集』（古本六種・印度本四種・文明本）では、易林本に一例「〈羣〉萌（クミ）」がみられるのみである。『落葉集』本篇では「発萌（はつぼう）」と「未萌（みぼう）」の二語が見えるが、『日葡辞書』（以下『邦訳日葡辞書』による）では「Fabŏ. ハッバウ（発萌）. Vocori qizasu.（発り萌す）すなわち，Moye izzuru.（萌え出づる）草や麦などが生え出ること．」のみである。なお、『落葉集』と『日葡辞書』との間で、オ段長音の開合が異なっている[一九]が、三・二で見たようにバウ・ボウ両形が他の資料に確認できるため、一方を誤りとは断じがたい。

一般に、声符からの類推は、口語では普通に用いられないような字で起こりやすいと考えられる（平山一九九三：一九七）。《萌》字を含む漢語は数例確認されるものの、多数の辞書に共通して見られる語は無く、この条件を満たす字だったといえよう。

続いて、漢字字書の類を確認する。ただし、漢字字書の字音の規範性は資料によって異なると考えられ、たとえば『字鏡集』の仮名音注などは、多分に人工的な性格を持つことが指摘されている（伊藤二〇二〇）。実際、天文本・永正本・応永本といった諸本では、いずれも「鬼同　鬼同」の注記とともに「ハウ」「ホウ」の二音のみを載せるが、「マウ」は見えない。二・一に示したように、注記に見える《鬼》は登韻の音を有するため、耕韻・登韻明母の反切から演繹的に導いたものと思われる[二〇]。なお、岩崎本『字鏡』（世尊寺本）は艸部を欠くため、《萌》を確認できない。

『和玉篇』諸本では、次のように音形の揺れが激しい[二一]。ただ、「ハウ（バウ）」の音を単独で載せる字書が無い一方で、「ホウ」のみを載せる字書が多いことは注意される。なお、以下では字体が「萌」ではなく「萌」であった文献にのみ、「（萌）」と示す。

ハウ：音訓篇立、賢秀写本
バウ：夢梅本（萌）、永禄本類字韻（萌）
ホウ：音訓篇立、賢秀写本、篇目次第（萌）、米沢本、龍門文庫本、玉篇略、伊勢家本、玉篇要略集、伝紹益筆本、静嘉堂文庫本
マウ：音訓篇立、賢秀写本、篇目次第（萌）、夢梅本（萌）、永禄本類字韻（萌）、松井本類字韻、長享本、拾篇目集
なし：弘治二年本（萌）

『平他字類抄』をイロハ引きに改変増補して成立した『色葉字平他』類の韻書では、一字に一音のみを示す例が多く、なかでも龍門文庫本（室町末写）・明応十年本には呉音・漢音・慣用音が豊富に見えることから、当時一般に流通していた字音を反映していると考えられる（大島二〇二二）。《萌》はキ部（和訓キザス）とモ部（和訓モユ）に見えるが、その付音は、次のように揺れている。

ホウ：天正十六年本キザス
ボウ：天正十六年本モユ、龍門文庫本キザス、龍門文庫本モユ
マフ（ウ）：新韻集キザス
なし：明応十年本、祐徳稲荷神社本

最後に、非漢文資料を確認する。「日本古典文学大系本文データベース」[二二]を利用して、《萌》字を検索し、「萌黄」などを除いて音読が期待される例のみを抽出したところ、中世以前の例としては次の5例が残った[二三]。『日本古典文学大系』（以下「旧大系」と略記）によって本文と所在を示す。

①朕兆未萌（ちんてうみぼう）の自己なるがゆへに、現成の透脱（てうとつ）なり。〔正法眼蔵・山水経〕（旧大系３０１頁）
②これを朕兆未萌（ちんてうみぼう）以前の大悟（だいご）とするなり〔正法眼蔵・山水経〕（旧大系３０５頁）
③通憲モ才學アリ、心モサカシカリケレド、己（おの）ガ非ヲシリ、未萌（みぼう）ノ

禍ヲフセグマデノ智分ヤカケタリケン〔神皇正統記下・二条天皇〕（旧大系１４８頁）

④與下義貞傾二忠心一盡二正義一、爲二朝家一輕レ命、先二勾萌一奏上レ罰二尊氏一〔太平記巻一四・新田足利確執奏状事〕（旧大系第二巻４７頁）

⑤春雷一タビ動ク時、蟄虫萌蘇スル心地シテ〔太平記巻一八・先帝潛幸芳野事〕（旧大系第二巻２３０頁）

①～⑤について、室町～近世初期にかけて書写された『正法眼蔵』７本、『神皇正統記』８本、『太平記』20本を調査した。その結果、『正法眼蔵』「山水経」①②には付訓例が見られず[二四]、『神皇正統記』③は、寛永七年の校合奥書を有する青蓮院本に「未萌」〔中４４ウ〕が見られたのみであった[二五]。一方で、『太平記』④⑤には、次のように、種々の語形が確認された[二六]。なお、『太平記』諸本の字体は全て「萌」であった。

④勾萌

ハウ：筑波大学本、南都本、教運本、日置本

ホウ：西源院本、前田家本、神宮文庫本、梵舜本、京大本

ボウ：玄玖本、米沢本

マウ：神宮徴古館本、簗田本

モウ：今川家本

ユ（マカ）ウ：前田家本、天正本

なし：神田本、内閣文庫本、毛利家本、益田本、野尻本

⑤萌蘇

ホウ：神田本、神宮徴古館本、今川家本、米沢本、益田本、前田家本、梵舜本、教運本、野尻本、京大本、日置本

ボウ：天正本

マウ：西源院本、簗田本、南都本

なし：玄玖本、筑波大学本、内閣文庫本（萌）、毛利家本

訓読：神宮文庫本

④⑤はいずれも漢籍に基づく表現とみられるため[二七]、漢音が期待されるが、特に「萌蘇」については、ホウとする本が多数を占める結果となった。

以上のように、『和玉篇』・『色葉字平他』類の韻書といった字書や、『太平記』諸本では、類推音と思われる「ホウ」「ボウ」が多数確認された。ただ一方で、「ハウ」「バウ」「マウ」等も一定数見られた[二八]。

三・四　第三節のまとめ

本節では、中古中世の諸資料における《萌》の字音を確認した。三・一節では、呉音資料ではマウ（上～去声）が一般的であり、室町末の一部の音義にホ（ボ）ウが現れることを確認した。三・二節では、漢音資料では、一部の資料にバウや去声が見られるが、鎌倉時代頃まではマウ（平声）が一般的であること、そして南北朝頃にはホウの加点例が散見されるようになり、室町時代にはマウ・ホ（ボ）ウ・ハ（バ）ウなど揺れることを確認した。このうち、ホ（ボ）ウは「萌」の字体の「朋」からの類推音と考えられることを論じた。三・三節では、古字書や日本語文資料においてもマウ・ホ（ボ）ウ・ハ（バ）ウなど揺れが確認されたが、特にホ（ボ）ウの例が多いこ

とが明らかとなった。

四　近世・近代における《萌》の字音

本節では、近世以降の《萌》の字音を問題とするが、当期ではオ段長音の開合は合流し、音韻上の区別を失っていたので、以下では、文献の用例を引く場合と仮名遣いを論じる場合を除き、モウ・ホウ・ボウのように現代仮名遣いで表記する。

四・一　第三節のまとめ

三・一で、妙法蓮華経をはじめとする《萌》の仏典読誦音は「マウ」であることを示した。近世に入ると、『古今韻会挙要』等の韻書類を利用して、伝統的な読誦音を改変する動きが見られることが指摘されている（中澤二〇一三）。その種の代表的な文献である日遠『法華経随音句』（寛永二十〈一六二〇〉年刊）の段階では、「愍哀群萌類文、萌ハ、音義ニ、云麥耕ノ反」、句解ニハ莫耕ノ切文」〔化城喩品〕とあり、改変は蒙っていない。しかし、本書の記述を引き継いでその欠を補った、日相『法華経音義補闕』（元禄十一〈一六九八〉年刊）には、次のように「ミヤウ」が現れる。

> 随音句ニ云、萌ハ音義ニ曰麥耕反、句解莫耕切文、音義句解所レ出韻字耕、漢音カウ呉音キヤウ也、今既ミヤクキヤウノ反、マクキヤウノ反呼時萌反也、皆人萌トヨメ圧、マウモ漢音オボエタリ、其故耕漢音マクカウノ反呼マウ反故也、切韻ノ二字共漢音麥耕莫耕反呼顕露ナル漢音也、古人羣萌類ヨマレシ遺書アリ、尤有二其謂一歟〔巻四・8オ～ウ〕

《耕》は『法華経』に現れないため、呉音を「キヤウ」とする根拠は不明であり、また「羣萌類ヨマレシ遺書」の具体名も明らかでないが、ここでは、反切から演繹的に「ミヤウ」を導いていることが確認できる。二・二節で述べたように、呉音を「ミヤウ」とするのは『磨光韻鏡』とも一致する。

しかし、「皆人萌トヨメ圧」とあるように、実際には「マウ」が用いられ続けたものと思われる。例えば、明和五（一七六八）年の序文を有する『法華和字解』では、「羣萌」は2例とも「ぐんまう」と読まれている。ただし、近世中後期の写とされる佼成図書館蔵『仮名書き法華経』では、「群萌」〔影印本３０４頁〕の他に「群萌」〔影印本１４６頁〕があり、近世初期の法華経音義に見えたホウ・ボウも、実際の訓読に用いられることがあったようである。いずれにせよ、「ミヤウ」は管見の限り見出せない。

『法華経』以外では、『補忘記』元禄版二九に「萌（去）牙（上濁）」〔地八オ〕とあるのが目に留まった（節博士は省略）。声点から呉音と考えられるが、やはり「マウ」が用いられている。

四・二　近世・近代の漢音資料における《萌》の字音

近世に入ると、読者層が拡大し、漢籍についても、多くの訓点本や注釈書が作成されるようになるが、音形を詳細に示す資料はあまり多くない。また、本論ではボウとホウの差異も問題としているため、なるべく清濁を区別する資料が望まれるが、そのような資料の選定はなおさら困難となる。本節では、『蒙求』注釈書、『示蒙句解』、『経典余師』の三種と、漢籍から用例を集めた字引（単字字書）の

類を調査する。

まず『蒙求』に登場する「逢萌」の字音の変遷を追う。

山本（二〇二一）は、『蒙求』標題の字音を積極的に示す近世資料として、毛利貞斎（注）『蒙求標題大綱鈔』（一六八三刊，以下「大綱鈔」）、同『故事俚諺絵鈔』（一六九〇刊，以下「絵鈔」）、同『蒙求標題俚諺鈔』（一七〇六刊，以下「俚諺鈔」）、宇野東山（注）『蒙求国字辨』（一七七七刊，以下「国字辨」）、田興甫（注解）『補註蒙求国字解』（一七七八刊，以下「国字解」）、下河辺拾水（図解）・吉備祥顕（考訂）『蒙求図会』初編（一八〇一刊）の6種を挙げている。このうち、『蒙求図会』は初編のみであり《萌》の字音を確認できなかったが、『国字辨』では「ホウ」、その他四本では「ボウ」が確認された。近代の島崎磯之丞解『訓蒙蒙求国字解』（一八八一刊）には、濁点が散発的で清濁ははっきりしないものの「ホウ」とある。塚本哲三編『有朋堂文庫　蒙求全』（一九二八刊）では「ばう」である。しかし、早川光三郎『新釈漢文大系58』（一九七三刊）では「はう」に変じている。以上より、近世・近代の蒙求読誦音ではホウ・ボウが用いられており、前代のモウは姿を消していることが分かる。

続いて、『孟子』に見える「萌蘖」と、『近思録』に見える「萌動」の、二語の字音の変遷を追う。

近世漢学所用の漢字音の位相的な在り方を論じた松井（一九七一）は、その中心資料として、朱子学の初等教科書『小学』の注釈書である中村惕斎『小学示蒙句解』（一六九〇年序）を取り上げている。本書には、漢字に対する濁点や不濁点（清音符号）が豊富に用いられており、「濁点の加点は当時の出版物としては綿密なほうである」（三一頁）と判断されている。この特徴は、同じく中村惕斎による『四書示蒙句解』（一七〇一序，一七一九刊）や『近思録示蒙句解』（一七〇一序，刊年不明）にも当てはまるものと思われるので、この二書を調査する。

また松井（一九七一）は、『小学示蒙句解』の訓読文よりも通俗的な字音を用いている資料として、『経典余師 小学之部』（一七九一刊）を挙げている。『経典余師』は、鳥取藩に仕えた渓百年（一七五四～一八三一）が著した、漢籍の素読の自習を目的とする注釈書であり、本文と平易な注釈に加え、上欄に書き下し文を示すスタイルによって、大いに流行した。諸本については鈴木（二〇〇七）に詳しく、天明六（一七八六）年の『四書之部』を嚆矢として、様々な部が発刊され、『四書之部』については五回の改版がなされたという。濁点の付与は、必ずしも義務的とはいえないものの、綿密である。なお本調査では、初版、三版、五版を調査したが、改版により濁点の有無が変動する箇所のあることが確認された。

これらに加えて、濁点の付与が義務的であったと思われる近現代の注釈書として、『有朋堂文庫』と『新釈漢文大系』の振り仮名も調査した。

以下に推移を示す（〈　〉内は刊年）。

・『孟子』告子上「萌蘖」

バウ（四書示蒙句解〈一七一九〉）

ほう（経典余師四書之部 初版〈一七八六〉）

ほう（同 三版〈一八二四〉）

ほう（同 五版〈一八五二〉）

ばう（有朋堂文庫〈一九二七〉）

ほう（新釈漢文大系〈一九六二〉）
・『近思録』巻五・克己「萌動」
バウ（近思録示蒙句解〈一七〇一以後〉）
はう（経典余師近思録之部 初版〈一八四三〉）
はう（有朋堂文庫〈一九二八〉）
はう（新釈漢文大系〈一九七五〉）

モウは見られない。また、『示蒙句解』がボウであるのに対し、『経典余師』は清音のホウで現れている。ボウは戦前の『有朋堂文庫』にも用いられているが、戦後の注釈書では清音のホウに変じている。

最後に、特定の漢籍、とりわけ四書に出現する字を立項した字引類の字音を確認する[三〇]。この種の字引の先駆となる『四書画引』（一六九三刊）をはじめとし、『大成四書字引』（一七七〇刊）、『増益四書字引大成』（一七八〇年刊）、『改正四書字引』（一八三八刊，一八五一再刻）、『増補四書字引大成』（一八五七刊）、『増補四書字引大全』（一八三六求版，一八六〇再版）などを確認したが、いずれも「萌（ホウ）」であった[三一]。「漢音ヲ字ノ右傍呉音ヲ字ノ左傍ニ記ス」という凡例を有する『経典熟字弁 四書之部』（一八〇九刊）でも「萌（ホウ）」とあり、注には『孟子』の「非（アラス）レ無（ナキニ）二一蘖（ホウカツノセイ）之生一」が引用されている。諸本で濁点が見られないことから、一八世紀の後半頃からは、清音のホウが広く行われていたものと考えられる。

以上から、近世の漢籍訓読において、《萌》の伝統的漢音であるモウの使用は廃れ、ボウ・ホウが用いられるようになり、なかでも一九世紀頃ではホウが目立つことが明らかになった。

四・三　近世の辞書・非漢文資料における《萌》の字音

本節では、三・三節に引き続いて、古辞書や非漢文体の日本語文資料から、近世に通行していた音形を探っていく。

近世の節用集では、易林本に見えた「群萌」が、寛文五年『真草二行節用集』・延宝八年『合類節用集』などに引き継がれているが、その他に《萌》を含む漢語は見出しがたい。『書言字考節用集』には、《萌》字を含む熟語は見られないようである。

音訓を示した漢字字書は枚挙に暇が無い。そこでまず、中国字書の和刻本を確認する。『大広益会玉篇』の付訓本として最初期のものである寛永八（一六三一）年刊本には、「萌（バウ）（マウ）」とある。近世を通じて流行した毛利貞斎『増続大広益会玉篇大全』の諸版（元禄五・享保二十・安永九・明治十）でも、同様に「萌（バウ）（マウ）」とある。一方で、寛文十一（一六七一）年刊の『字彙』の和刻本では「萌（バウ）」とある。また、これに先立つ承応二（一六五三）年刊行の、『字彙』を単字と音訓のみからなる簡便な体裁とした『字集便覧』では「萌（ハウ）」とある。

『和玉篇』の近世版本は、四百七十七部首系統、五百四十二部首系統、画引系統に大別される（鈴木二〇一二）。そこで、諸版を多く収める『江戸時代流通字引大集成』所収の諸本を調査し、その結果を表3～表5にまとめた。

表3　四百七十七部首系統における《萌》の字音

	版種・書名	刊年	用例
	慶長十五年版	一六一〇	萌マウ
	慶長十八年版	一六一三	萌マウ
	真草倭玉篇	一六二七	萌マウ
	真草倭玉篇	一六四二	萌マウ
	増補倭玉篇	一六六二	萌マウ
	増字倭玉篇	一六七〇	萌マウ
	真草倭玉篇中川版	元禄頃	萌まう

表4　五百四十二部首系統における《萌》の字音

	版種・書名	刊年	用例	
A	寛永五年版	一六二八	萌マウ	萌バウ
B	寛永七年版	一六三〇	萌マウ	萌バウ
C	寛永九年版	一六三二	萌マウ	萌バウ
D	寛永九年中野版	一六三二	萌マウ	萌バウ
E	寛永十五年版	一六三八	萌マウ	萌ハウ
F	寛永十六年版	一六三九	萌マウ	萌ハウ
G	新刊真草倭玉篇	寛永	萌ハウ	萌□ウ
H	正保三年版	一六四六	萌●ウ	萌マウ
I	慶安四年版	一六五一	萌ハウ	萌マウ
J	慶安五年版	一六五二	萌ハウ	萌マウ

表5　画引系統における《萌》の字音

	版種・書名	刊年	用例1	用例2
K	袖珍和玉篇	一六六四	萌ハウ	萌マウ
L	新刊画引和玉篇	一六七〇	萌ハウ	萌マウ
M	増補二行和玉篇	元禄	萌ハウ	萌ハウ
N	増訓画引和玉図彙	一六九三	萌まウ	萌ハウ
O	小篆増字和玉篇綱目	一六九五	萌バウ	萌ハウ○マウ●
P	大広益会真草和玉篇	一七〇七	萌□ウ	萌ハウ
Q	字林和玉篇大成	一七二一	萌まウ	萌ハウ
R	早引和玉篇大成	一七二五	萌マウ	（なし）

表3から、まず四百七十七部首系統の諸本では、慶長十五年版に見られた「マウ」が継承されていくのが分かる。

一方、五百四十二部首系統では、表4に示す通り、《萌》が二箇所に掲載されている。この系統のさきがけとなる寛永五年版（A）では、《蕚》と《萍》の間に「萌（マウキザス）モユル」、《芽》と《藪》の間に「萌（バウハジメ）マウキサス」とある。しかし、寛永十五年版（E）では2字目の右傍訓「バウ」が「ハウ」に代わり、以後継承されていく。さらに、正保三年版（H）では1字目の右傍訓「マウ」が埋木により「●ウ」となっており、その五年後の慶安四年版（I）では「ハウ」に変じる。この改変は、単独でモウを掲出することが、当時において受け入れ難くなっていたことをうかがわせる。

画引系統でも《萌》を重出する字書が目立つ（表5）。『増補二行和玉篇』以降は字体の区別が捨象され、『早引和玉篇大成』に至って統合される。モウは、常にホウの左傍訓として現れており、単独での付音例はもはや見られなくなっている。

非漢文資料については、三・三節で取り上げた『神皇正統記』の「未萌」と『太平記』の「萌蘇」「勾萌」に加え、『太閤記』の「未萌」、謡曲「俊寛」の「不萌」の語形を、写本や版本から確認する。なお、近代以降に刊行された注釈書は、底本の語形が反映される可能性を考慮し、調査対象から外した。

『神皇正統記』は、江戸時代の版行としては、慶安二（一六四九）年と慶応二（一八六六）年の『評註校訂神皇正統記』があるのみである。三・三節で見た通り、漢語「未萌」に対し、青蓮院本では「ミマウ」の傍訓が見えたが、慶安二年版本では「未萌（みぼう）」とあり、『評註校訂神皇正統記』では「未萌（みほう）」とある。ただし、後者における濁点の加点は散発的であり、ホウかボウかは不明である。

『太平記』は、仮名書きの写本については土井本と河野美術館四十二冊本（河野本）を調査し、整版本については、日東寺（一九九四）の系統分類を参考にして、元和八（一六二二）年、寛文四（一六六四）年、寛文十一（一六七一）年、延宝八（一六八〇）年、天和元（一六八一）年（万治三年刊本系）、元禄十（一六九七）年、元禄十一（一六九八）年、享保七（一七二二）年の刊本と、寛永頃無刊記本を調査した。その結果、「萌蘇」は全ての本でホウソであったが、「勾萌」は土井本が「こうほう」、河野本が「こうばう」、元和八年本以下の版本は全てコウマウ（元禄十年版は「こうもう」）であった。なお、元禄十年版以外の版本の字体は全て「萠」であった。

甫庵による二十二巻本『太閤記』には、「未萌」という漢語が、巻八に2例、巻二十に2例見られる。長谷川（一九九一）を参考にして、内閣文庫蔵無刊記版、正保三年版、寛文二年版（巻二十のみ）、宝永七年版を調査した結果、「ミホウ」「ミハウ」「ミボウ」「ミバウ」の4通りの表記（平仮名も片仮名で示す）が確認されたが、「モウ」や「マウ」は見られなかった。字体は全て「萠」であった。

謡曲「俊寛」の詞章に、「金雞夜宿（きんけいよるしゅく）す不萌（ふほう）の枝（し）」（旧大系『謡曲集下』四一五頁）という一節がある。『謡抄』によれば「祖師ノ頌」とのことであるが、具体的な典拠は明らかでない。光悦謡本や元和卯月本には傍訓は無いが、明和改正謡本（一七六五刊）には「フバウ」とあり、現行の観世流謡本（大成版）でも「フボオ」と濁っている。一方、現行の宝生流・金剛流・金春流では「フホオ」と歌うようであり[三一]、流派によって清濁は異なるようだが、モウが全く見られない点は『太閤記』と同様である。なお、オ段長音の表記については、本節では深く立ち入らないが、『当流謡百番仮名遣開合』（一六九七刊）では合音で「ふほう」とするのに対し、『音曲玉淵集』（一七二七刊）では開音で「ふはう」とするという揺れがみられた。

以上を要するに、一七世紀の半ば頃まではモウも散見されるものの、それ以後においては、『太平記』「勾萌」の語形として、また『和玉篇』や『増続大広益会玉篇大全』の左傍訓として残存するにすぎなくなっており、標準的な字音はホウまたはボウとなっていたことが想定される。

四・四　近代の辞書における《萌》の字音

近代に入り、西洋から大量の新しい制度や文化が輸入されるよう

になると、その吸収にあたって多くの漢語が借用・転用・新造されたため、日本語に占める漢語の割合は大幅に増加することとなった。このような状況下にあって、明治初期には多くの漢語辞書が次々と編纂され、また欧米の辞書に範をとった近代的な国語辞書も作られるようになった。最後に、これらの辞書における、《萌》字を含む漢語を確認し、現代とのつながりを考えたい。

まず、明治初期の漢語辞書を確認する。松井（一九八六）は、明治初期の漢語辞書の多くが、『漢語字類』（明治二年一月刊）の見出し語を直接ないし間接に受け継いでいること、その一方で語形については辞書間での揺れが大きいことを論じている。そこでまず『漢語字類』を確認すると、「萌兆（ほうてう）」「一芽（ほうが）」「一蘖（ほうがつ）」の三語が確認された。そして、『漢語字類』の影響が大きい辞書として松井（一九八六）で取り上げられている10辞書を確認したところ、次のようになった。

『布令必用新撰字引』（明治二年四月刊）：「萌兆（ハウテウ）」「萌芽（ハウカ）」
※ハウカのハの右上に黒い点あり、濁点か不審
『新撰字類』（明治三年七月刊）：「萌兆（はうてう）」「一蘖（はうがつ）」
『漢語便覧』（明治三年十月序）：「萌兆（はうてう）」「一蘖（はうがつ）」
『増補新令字解』（明治三年刊）：「萌兆（ハウチョウ）」「萌芽（ハウガ）」「萌蘖（ハウゲツ）」
『大全漢語解』（明治四年五月刊）：「萌兆（ハウテウ）」「一芽（ハウカ）」「一蘖（ハウバク）」
『新撰字解』（明治五年秋刊）：「萌兆（ハウチョウ）」「萌芽（ハウガ）」「萌蘖（ハウゲツ）」
『布令必携新聞字引』（明治五年秋刊）：「萌兆（ハウテウ）」「萌芽（ハウガ）」
『漢語類苑大成』（明治六年六月序）：「萌兆（ハウテウ）」「萌蘖（ハウガツ）」
『世界節用無尽蔵』（明治六年四月刊）：「萌兆（ぼうちやう）」「一芽（はうが）」「一蘖（はうげつ）」
『漢語二重字引』（明治六年七月刻）：「萌兆（ハウテウ）」「萌芽（ハウゲゲ）」「萌蘖（ハウゲゲ）」

最後の二書には濁音のボウ（バウ）も見えるが、多数を占めるのは清音のホウ（ハウ）である。

続いて国語辞書を確認する。『和英語林集成』では、三版（一八八六刊）に「HôgA ハウガ 萌芽」「MIHô ミハウ 未萌」の二語が見える。また、高橋五郎『漢英対照いろは辞典』（一八八八刊）には、「萌發（はうはつ）」「萌芽（はうが／ほうが）」「萌黄（はうくわう）」「萌蘖（はうけつ）」「萌兆（はうてう）」「萌生（はうせい）」「端萌（たんはう）」「欝萌草（うつはうさう）」「未萌（みはう／びばう）」の9語が見え、「未萌」のみにボウの音が現れている。

しかし、『言海』（一八八九～九一刊）・『日本大辞書』（一八九二～九三刊）では、この9語のうち立項されるのは「萌芽（はうが）」のみである。『大言海』（一九三二～三七刊）では「萌蘖（はうげつ）」が加わるが、『和英語林集成（三版）』に見えた「未萌」や、多くの漢語辞書に見えた「萌兆」は立項されていない。このことから、一般に広く使われ続けた漢語は、「萌芽」のみであり、その語形も、現代語と同様にホウガで安定していたと考えられる[三三]。

以上から、近代の漢語において一般的に用いられた音は、清音のホウであり、また一般に広く使用された漢語は「萌芽」にとどまったことがうかがえる。

四・五　第四節のまとめ

四・一節では、法華経字音学においてミョウ（ミャウ）という呉音形が導かれることもあったが、呉音のモウ（マウ）が用いられ続けていることを確認した。四・二節では、近世の漢籍訓読では、前

代までに一般的であったモウ（マウ）が、ほぼ用いられず、ホウ（ハウ）・ボウ（バウ）が多く使用されるようになること、特に後期はホウが目立つことを確認した。四・三節では、辞書や非漢文資料においてもモウ（マウ）の使用が減じていることを確認した。四・四節では、近代の漢語では、清音のホウが一般に用いられたことを確認した。

以上を踏まえ、最後に三節・四節で述べたような字音の推移をたどった背景を考えていきたい。

五　《萌》の字音の変化の背景

五・一　モウが使用されなくなる背景

前節で、近世以降、漢籍や非漢文資料におけるモウ（マウ）の使用が減じることを確認した。その背景については、一つには常用字体であった「萌」の「朋」からの類推によるホ（ボ）ウが広まり、モウを淘汰したことが考えられるが、特に漢籍訓読においてモウが全く見られなくなることについては、他の要因も考えられる。

ここで注目したいのが、近世『蒙求』注釈書の漢字音の変遷である。今、『蒙求』標題に現れる、撥音韻尾を有する明（微）母字のうち、伝統的な蒙求読誦音がマ行はじまりであった字について、四・二節に挙げた注釈書（うち大綱鈔・絵鈔・俚諺鈔はともに毛利貞斎の著）の字音を示すと、次頁表6のようになる。ハ行・バ行で現れる例は灰色に塗りつぶした。

表6から、次のようなことが見て取れる。

・『大綱鈔』では、《明》《命》を除き、明母字を一律にバ行としている。

・『絵鈔』では、《満》《曼》《湎》《濛》《萌》はバ行だが、他はマ行となっている。

・『俚諺鈔』は、『大綱鈔』と『絵鈔』の中間的な性格を有し、バ行マ行両形を記す例もある。

・『国字辨』では、《曼》《湎》《萌》をバ行（《萌》は清音か）とし、他はマ行あるいは付訓なし。

・『国字解』では、《萌》以外全てマ行となっており、おおむね伝統読誦音に回帰している。

『大綱鈔』では、流通している漢字音（以下「流通音」）に従わず、マ行始まりの音をバ行に改変していることが明らかである。《明》《命》の二字が例外となるが、いずれも呉音形（ミョウ）と漢音形（メイ）が頭子音以外でも異なり、かつ呉音形も広く流通していたと考えられる。裏を返せば、流通音がマ行音の場合、呉音的と判断し、頭子音をバ行に置き換えることで、人為的に漢音を作り出して用いたのではないかと想像される。

それに対して『絵鈔』は、蒙求故事にちなむ挿絵が印刷されており、『大綱鈔』に比べ童蒙教育的性格が濃い。このゆえに、流通音をそのまま用いたのではないかと思われる。しかし例外的にバ行を用いた漢字が5つあり、うち《満》を除く《曼》《湎》《濛》《萌》4字は、日常ではあまり使用されない漢字といえよう。『国字辨』でも、依然として《曼》《湎》2字にバ行が用いられている。

表６　近世『蒙求』注釈書におけるマ行はじまりの明母字の字音の変遷

字	標題	声母	摂	伝統蒙求音	大綱鈔 1683	絵鈔 1690	俚諺鈔 1706	国字辨 1777	国字解 1778
孟	劇孟一敵	明	梗	マウ	バウ	マウ	マウ(右) バウ(左)	-	モウ
孟	孟軻養素	明	梗	マウ	ハウ	マウ	バウ	-	モウ
孟	孟宗寄鮓	明	梗	マウ	バウ	マウ	マウ	-	モウ
孟	孟光荊釵	明	梗	マウ	ハウ	マウ	マウ	-	モウ
孟	趙孟疵面	明	梗	マウ	バウ	マウ	バウ(右) マウ(左)	-	モウ
孟	孟陽擲瓦	明	梗	マウ	バウ	マウ	バウ	-	モウ
孟	孟嘉落帽	明	梗	マウ	バウ	マウ	バウ(右) マウ(左)	-	モウ
孟	孟嘗還珠	明	梗	マウ	ハウ	マウ	マウ	-	モウ
満	韋賢満籯	明	山	マン	バン	バン	バン	-	マン
満	孔融坐満	明	山	マン	バン	バン	バン	-	マン
曼	曼容自免	微	山	マン	バン	バン	バン(右) マン(左)	バン	マン
曼	曼倩三冬	微	山	マン	バン	ハン	バン	-	マン
面	趙孟疵面	明	山	メン	ベン	メン	ベン	-	メン
湎	玄石沈湎	明	山	メン	ベン	ベン	ベン	ベン	メン
蒙	蒙恬製筆	明	通	モウ	ボウ	モウ	バウ(右) マウ(左)	-	モウ
濛	王濛市帽	明	通	モウ	ボウ	ボウ	ボウ	-	モウ
萌	逢萌挂冠	明	梗	マウ	ボウ	ボウ	ボウ	ホウ	ボウ
門	于公高門	明	山	モン	ボン	モン	モン	-	モン
門	張昭塞門	明	山	モン	ボン	モン	モン	-	モン
門	魏勃掃門	明	山	モン	ボン	モン	モン	モン	モン
門	西門投巫	明	山	モン	ボン	モン	モン	-	モン
門	鄭崇門雑	明	山	モン	ボン	モン	モン	-	モン
命	嵇呂命駕	明	梗	メイ	メイ	メイ	メイ	メイ	メイ
明	孔明臥龍	明	梗	メイ	メイ	メイ	メイ	-	メイ
明	離婁明目	明	梗	メイ	メイ	メイ	メイ	-	メイ
明	淵明把菊	明	梗	メイ	メイ	メイ	メイ	-	ノ(メ?)イ
明	慈明八龍	明	梗	メイ	メイ	メイ	メイ	-	メイ
鳴	鳴鶴日下	明	梗	メイ	ベイ	メイ	メイ(右) ベイ(左)	メイ	メイ
鳴	稚珪蛙鳴	明	梗	メイ	ベイ	メイ	ベイ	メイ	メイ

以上から考察すると、「曼」「湎」「萌」のような、特に使用頻度の低い字においては、撥音韻尾字か否かに関わらず、呉音―マ行・漢音―バ行という字音体系の規範意識に基づき、バ行始まりの音を漢籍で用いることが好まれたのではないかと思われる[三四]。近世の漢籍において《萌》にボウが頻用されるようになる理由は、この意識によるところが大きいのではないかと考える。

五・二　ボウが使用されなくなる背景

四・二節で、近世の漢籍で《萌》をボウと読む例が少なからず見られた。しかし四・四節で、近代漢語辞書・国語辞書では、漢語を清音でホウと読む例の多いことが確認された。

この背景としては、《萌》は近代以降も引き続き「萌」と書かれたり、また印刷されたりすることが多く、時代を通じて《朋》の字音からの類推を受け続けたが、《朋》にはボウ・ホウの二音からホウに一元化[三五]するという流れがあったため、それが《萌》にも反映されたものと解釈する。

『明朝体活字字形一覧 1820～1946 年』によれば、築地五号（一八九四年）などに「萌」、築地三号（一九一二年）などに「萌」という活字字形が見える。実際、『言海』には「萌」が、『日本大辞書』には「萌」が用いられている。「萌」とは別に、『康熙字典』にも掲載が無い「萌・萌」といった活字が必要だったのは、近代以降も手書きにおいては「萌」が一般的な字体だったからではないかと思われる。

続いて、《朋》字や《朋》を構成要素とする字における、ホウへの一元化の流れを確認する。

《朋》は、現代はホウとしか読まないが、三・二節で既に述べたように、全濁字であり、呉音はボウであった。『日葡辞書』には、《朋》を含む熟語に Bôyû・Fôyû（朋友）、Dôbô（同朋）がある。「朋友」は、中世古辞書でも語形揺れが認められ、易林本『節用集』は「ホウイウ」、元亀二年本『運歩色葉集』は「ホウユウ」であるが、明応五年本『節用集』・静嘉堂文庫本『運歩色葉集』等には「ボウユウ」とあり、また『伊京集』には「ボウウ」とある。「同朋」は、中世古辞書（節用集古本六種・運歩色葉集など）ではほとんどドウボウである。現代ではそれぞれホウユウ・ドウホウと読むのが一般的となっている[三六]。

《朋》を構成要素とする《崩》は全清字であるため、演繹的には呉音漢音ともにホウが期待される。実際に保延本『法華経単字』の反切「北（入）東（去）反」は清音を示している。しかし、至徳版『法華経音訓』では去濁点が施されており、中世に濁音形も生じたことがうかがえる。『日葡辞書』では、Fôguio（崩御）の他に、Bôrô（崩漏）・Bôqei（崩傾）の二語が見える[三七]。また、国会図書館蔵『玉塵抄』巻五には「天子ニ崩（スムホウ）云イ諸侯ニ薨（コウ）云イ」〔15ウ〕という清音（スム）注記の例があることも、当時濁って読まれることがあった証拠となろう。このほか、《棚》にも、『色葉字平他』の明応十年本や龍門文庫本には「ボウ」の音形が確認される。

以上、《朋》や《朋》を構成要素とする諸字には、ボウ・ホウという複数音の状態からホウに一元化していくという、共通する流れがあることを確認した。《萌》字も、一般的な字体が「萌」であったために、この流れに沿った変化を遂げたものと思われる。

なお、呉音・漢音が清濁のみで対立する字の場合、濁音形（呉音）

が残りやすいという傾向が松井（一九七一）などに指摘されており、漢音資料でも時代が降るにつれこの種の濁音形の混入が増えることが明らかにされている（佐々木二〇〇九第三部第四章）。しかし、「朋」（ホウ・ボウ→ホウ）についてはこの傾向に反するものとなる。この理由は詳らかでないが、例えば「朋友」という語は、『論語』に８例みえ、五倫の一つに数えられる儒教の基本単語であったため、近世寺子屋教育などを通じて、漢音形のホウユウがボウユウを淘汰したといった事情が考えられるかもしれない[三八]。

六　結論と今後の見通し

本稿では、以下の点を明らかにした。

・《萌》は、中古中世の訓点資料から帰納する限りでは、呉音・漢音ともにマウが一般的であった。ただし、呉音は上～去声、漢音は平声で、声調は対立していた。

・慣用音の「ホウ」は、《萌》の手書きにおける字体として日本で流通していた「萠」の下部の、「朋」に基づく類推音であり、室町頃には一般的な字音となっていたと見られる。

・近世に入るとモウ（マウ）はほとんど用いられなくなり、漢籍訓読ではボウないしホウが用いられた。その理由の一つとして、常用字でない場合に、漢音が一律にバ行で揃えられるという動きがあったのではないかと考察した。

・近代以降、漢語に使用する字音は、清音のホウが一般的となった。その理由については、《朋》字に起こった一元化（ボウ・ホウ→ホウ）に連れ立ったものと解釈した。

最後に本稿における課題を述べる。まず、五・一節で述べた「常用字でない場合に、漢音が一律にバ行で揃えられるという動き」については、毛利貞斎を中心とする『蒙求』注釈書のみに依拠した仮説にすぎないため、どの程度の広がりを持つのかについて今後さらに検討したい。また、近世における開音形ハ（バ）ウと合音形ホ（ボ）ウの揺れについては本稿では考察の対象外としたが、本居宣長の『字音仮名用格』以前の仮名遣いの規範がどのようであったかという問題につながる。さらに、「萠」の字体史については、注一八に簡単に記したものの、日中間の交渉等なお不明な点が多く、諸資料を参看して、改良を目指したい。

本論では、《萌》という字の漢音が、中世から近世にかけて、モウ（マウ）からボウ・ホウに変じること、近現代にかけてホウに収束していくことを明らかにした。どの時代にどの字音が有力であったのかという情報は、日本語史のみならず、古文献を資料とする学問にとって重要なものであると思われ、記述の蓄積が望まれる。

また、漢字研究としては、字音が変化していく背景を考察することが望まれるが、各字の字形・字義・用法・使用頻度の変化や、規範意識の変化とどう連動するのかといった観点が必要であるように思われる[三九]。今後、様々な字について「字音史」を記述し、それらを通じて、傾向の分析や、類型化・一般化を行っていくことを目指したい。

【注】

一 推定音価は平山（二〇二二）表15の音価表による。

二 玄応音義については周法高（一九六八）、慧琳音義については上田（一九八七）を利用した。

三 早稲田大学古典籍総合データベースで公開されている抱経堂叢書本による。通志堂本では「云」とある。

四 『集韻』では、庚韻三等の明小韻（眉兵切）にも《萌》が見え、義注は「蕨萌、艸名」とある。しかし「蕨萌」は『集韻』以外に用例が見えず、本論には関与しない音類と考える。

五 『角川新字源 改訂新版』は、凡例には記載はないが、慣用音については全て現代仮名づかいで示していると見受けられる。そのため、慣用音が「ホウ」とあるのは、開音のハウではなく合音のホウであるということを示すものではない。

六 《群》に対する去声点は、外形上は「丨」のような線点であるが、当該資料においては濁音を示す。佐々木（二〇一二）によれば、この線点は、字音直読資料ないし漢字片仮名交じり文において親鸞が使用したという。

七 ただし、5例全てにおいて、濁声点は線点「丨」であり、また単声点も小ぶりのものである。佐々木（二〇一二）によれば、板東本『教行信証』には少なくとも3種の加点形式があり、ここに示したような形式の点は、親鸞とは別人による後筆の疑いがあるという。

八 このうち、岡本（一九六九：四二）も指摘するように、「妄」「罔」「網」「晩」は軽唇音化を起こした微母字であるため、バ行で現れることには問題ない。しかし、「冕」「敏」などは、他の漢音資料に徴してもバ行が一般的であり、例外となる。

九 用例検索にあたっては、漢籍・仏書・空海関連資料については、「中央研究院漢籍電子文献資料庫」と「大蔵経データベース 2018 版」を主に用い、「中国基本古籍庫」を補助的に活用した。その他の資料については、本稿末尾の「索引類」に記した資料の他、OCR を活用して検索した。

一〇 天理本『文選』巻二十六、『管見記』紙背『文選』巻二、『白氏文集』正和頃点、『管見抄』の用例については、鄭門鎬氏よりご教示いただいた。

一一 『三教指帰』光明院本・龍門文庫本については、月本雅幸氏にご判断いただいた。

一二 2「萌（去）漸（平）」、8「萌（去）兆（去濁）」、9「善萌（去）」、15「萌（去）動（平）」など。これらは、呉音の混入と解釈する。

一三 耕韻では、「甍（上）」〔書陵部本『春秋経伝集解』巻十八文永点・襄公二十八年〕、「甍宇」〔猿投神社蔵『文選』正安頃点〕、「民氓（平）」〔書陵部本『群書治要』巻四十四「潛夫論」〕、「甿隷」〔天理本『文選』巻二十六元徳二年点〕などが確認できる。ただし、「氓（平濁）」〔書陵部本『群書治要』巻二十九「晋書上」〕の例もある。また、庚韻二等明母字では、「猛（上）」〔書陵部本『文鏡秘府論』北保延二年点〕、「孟軻養素」〔長承本『蒙求』29行〕、「盲」〔黒川本『色葉字類抄』下五八ウ〕などが確認できる。ただし、『色葉字類抄』の右傍の音注は必ずしも漢音に限らないため、「盲」は呉音の可能性も否定できない上、訓点資料では「盲（平濁）」〔書陵部本『群書治要』巻八「韓子外伝」〕、「盲（平濁）瞽（上）」〔天理本『三教指帰』巻中久寿二年点〕のように、バウの方が目立つ。《盲》と同音の《𥈭》に至っては「𥈭（平濁）」〔前田本『色葉字類抄』下28才〕の例しか見出せない。管見の限りでは、微母字である《亡》を声符に持つ字は、バウで現れることが多いように思われる。

一四 この場合、『大慈恩寺三蔵法師伝』にみられた「バウ」をどう説明するかが問題となる。素朴には、韻書・字書に見られる「莫耕反」「麦耕反」といった反切に由来することが考えられるが、築島（一九六七：一四五）や佐々木（二〇〇九：二七五～二七六）にも述べられるように、興福寺本・人文研本では反切注はきわめて僅少であり、反切に基づいた人為的漢音が用いられたとは考えがたい。また築島（一九六七：二二七～二二八）は、撥音韻尾を有する明母・泥母字は、母音の開口度が大きいほどバ行で現れやすいという可能性を指摘したが、岡本（一九六九）の批判にもあるように、明瞭な傾向とは認めがたい。蔵漢対音資料を用いて河西方言を分析した高田（一九八八：八九～九〇）は、「鼻音に終わる音節では多くがチベット文字の単純鼻音で表記されるが時に'a-chung を伴った有声破裂音字母でも写される」ことを指摘し「泥母，明母は音韻としては単一の/ⁿd/, /ᵐb/であって，それが鼻音に終わる音節では鼻音韻尾の遡行同化によって音聲的に鼻音が強く響いたもの」と解釈している。この音声的な揺れが、日本語側でマウ・バウの二重形として並存し続けていたという可能性も考えられるだろう。注8や注12に示した《冕》《敏》《盲》といった諸字の漢音形も、古くは二重形を有し、バ行の側に一元化したのかもしれない。

一五　南北朝～室町期の写とされる広隆寺本（斯道文庫蔵）には「萌（マウ）・蘖（ゲツ）」とあるが、「マ」と「ウ」の間に濁点らしき点が見える。また、諸本が「キザスコト」と訓読する「吾如有萌焉」〔告子上〕に対しては、「す」「こと」のヲコト点に加えて、左傍に朱筆で「〻スルヿ」とある。これが濁点であればバウ・ボウを示したものと考えられるが、いずれも位置や形状が通常のものと異なり判然としないため、ここでは事実の指摘にとどめる。

一六　《逢》は、『広韻』によれば〈会う〉の意味では鍾韻（漢音はホウ）、姓氏としては江韻（漢音はハウ）である。沢存堂本では後者の字体を「逢」として、「逢」と区別しているが、『蒙求』諸本ではどちらの字体も見られる。字音についても、長承本では「ホウ」、正倉院本では「ハウ」とあり、古くから双方が用いられたようである。なお大永本の「蓬」は「逢」の誤字であろう。

一七　当該資料の角筆点については、小林（二〇〇四）五八七～五八八頁ならびに佐々木（二〇〇九）資料編を参照。なお、二〇二三年の五月に、国立国会図書館に特別に許可を賜り、原本調査を行って確認した。

一八　《明》の初唐標準体は、偏を《目》に作る「明」であった（斎木二〇一二：三七一）こともあり、日中問わず、《明》と《朋》とは書写上紛らわしいペアであったと思われる。実際、『宋本玉篇』附録「分毫字様」に「明朋上眉兵切清也、下薄登切党也」という例が挙がっている。また、陳至徳四（五八六）年写の敦煌本『摩訶摩耶経』巻上に、「萌」に近い字体が見える（「漢字字体規範史データセット単字検索」による）。以上からすれば、《萌》が「萌」と書かれることは中国でもしばしばあったと思われるが、『干禄字書』『五経字様』『九経字様』『古俗字略』『宋元以来俗字譜』といった中国の字様書や異体字字書に「萌」は掲出されず、『康熙字典』や『漢語大字典（第二版）』にも収録がない。主として『漢語大字典』未収の字形を収録する方針の『明清小説俗字典』にも、《萌》は立項されない。恐らく、中国においては、「萌」の字形は一般化しなかったように思われる。一方、日本では、既に示したように、少なくとも平安時代以降は「萌」の字体が一般化していたと思われる。早い例としては、長承本『蒙求』の他、天暦二（九四八）年の加点識語を有する国宝『漢書』楊雄伝第五十七の、《弸》《駢》に対する反切（普萌反）の書き入れに、「萌」が用いられている。ただ、「萌」を《萌》の異体字とする記述は少なく、管見では、文政十一（一八二八）年の序を有する『正楷字覧』に「下㊐ナリ、㊐ニ非」とあるのが早いかと思われる。なお、江守（一九八六）は、「萌」について「こんな字はない。誤字であるが、実際に書いている人もいるので、俗字としている辞書が多い」と述べる（五六頁）。

一九　この点について、『邦訳日葡辞書』の注には「萌（バウ）は萌（ボウ）が通用した」とあり、稿者の解釈にも通じるところがあるように思われるが、両者が別字種として意識され、字音によって字体が書き分けられたというようにも読める。確かに、四・三節に示す近世の『和玉篇』のように、「萌」と「萌」が別々に掲載される資料は存在し、別字種として意識されることもあった可能性は否めない。しかし、字体「萌」には字音「バウ」が「萌」には「ボウ」がそれぞれ対応するということは、事実として認められない。その点で、やや理解しがたい記述である。

二〇　ただし、例えば天文本の《明》には「メイ」「ヘイ」両音があるように、『字鏡集』諸本において撥音韻尾を有する明母・泥母字にマ・ナ行が現れないというわけではないようである。

二一　『音訓篇立』には《萌》が二箇所に現れるという特徴があり、本書と同系統にある『賢秀写本』でも同様である。『音訓篇立』第五冊二十一ウの《萌》には、仮名音注「ハウ」「ホウ」「マウ」と和訓「クツル」「キサス」「ヲキイテタリ」があり、『賢秀写本』では「クツル」が重出し「ヲキイテタリ」か「ヲヒテタリ」となる他は同じである。もう一方の、『音訓篇立』同冊二十四オの《萌》には、反切注「莫耕反」、漢文注「芒也本也始也」（『新撰字鏡』と一致）、和訓「スケ」があり、『賢秀写本』では、反切注が削られているが漢文注と和訓は受け継がれ、更に一字目にあった仮名音注「ハウ」「ホウ」「マウ」と和訓「クツル」「キサス」「ヲイテタリ」が追記されている。和訓の在り方から、一字目は《崩》字との混乱が影響していることがうかがえる。

二二　本データベースは二〇二三年四月にサービスが終了した。そのため、二〇二二年の調査時の記録に依っている。

二三　『日本書紀』仁徳紀に見える「民萌」は、漢語出自とみられるが、諸本「オホンタカラ」と訓読するので除いた。また『日本古典文学大系82　親鸞集　日蓮集』所収「親鸞聖人御消息集（善性本）」に「萌友（ほうう）〔179頁〕」という例が見える。「朋友」の誤りと思われるが、影印等を確認することができなかったため、指摘にとどめる。

二四　水野（一九六五）に「古写本」として挙がる諸本（玉雲寺本を除く）のうち、「山水経」を含む全九院蔵真筆「山水経」・乾坤院本・正法寺本・長円寺本・瑠璃光寺本・秘蜜正法眼蔵・泉福寺本正法眼蔵抄を選び、『永平正法

眼蔵蒐集大成』所収影印によって調査した。字体は、泉福寺本は「萌」、他六本は全て「萠」であった。なお、旧大系所収の『正法眼蔵』は抄出であるため、①②が『正法眼蔵』の全用例というわけではない点をことわっておく。

二五 他に、白山本・猪熊本・六地蔵寺本・享禄本・龍門文庫本・只見本・書陵部本を調査した。字体は、白山本と書陵部は「萌」、他六本は全て「萠」であった。

二六 各本の詳細については長坂（二〇〇八）を参照されたい。

二七 ④「勾萌」は、春を司る神である「句芒」と解する説と、「禍の前兆」と解する説とがある。⑤は、『白氏文集』巻四「鴞九剣」の「蟄虫昭蘇萌草出」が出典として引用される。「鴞九剣」の例は、『礼記』「楽記」の「然後草木茂、区萌達、羽翼奮、角觡生、蟄虫昭蘇……」を典拠としている。

二八 このほか、延慶本『平家物語』に「萠（ボウ）（去）芽（ケ）（平）」（五末43ウ5）を確認している。また、北﨑勇帆氏から、応永本『論語抄』に「聖人ハ未萠（ビボウ）ヲ知ル。」（翻刻646頁）の例がある旨をご教示いただいた。

二九 本書に示される読み癖は、一般には室町時代の発音を反映するものとされるが、貞享版に見えず元禄版のみに見えることも踏まえ、便宜上ここに記した。

三〇 この種の字書については、関場（二〇〇六）に詳しい。

三一 『四書画引』には「分ー、ー蘖」という注があるが、前者は『論語』「季氏篇」の「邦分崩離析、而不能守也」に由来すると考えられ、注21にも指摘した《崩》との混同が認められる。

三二 『新編日本古典文学全集59 謡曲集②』三〇四頁の頭注による。また、坂本清恵氏のご厚意により、宝生流・金剛流・金春流の現行謡本の画像を拝見して確認した。金春流の謡本には当該箇所に「スム」という注記があり、清音であることが確実である。

三三 「日本語歴史コーパス」（中納言 2.7.2 データバージョン 2023.03）で語彙素を「%萌%」、語種を「漢」に指定して検索したところ、「萌芽」が80例、「未萌」が6例、「萌動」「萌発」が『明六雑誌』に各1例で、「未萌」は一九〇一年の『太陽』2例が最新の用例であるのに対し、「萌芽」は一九〇一～一九二五年に合計53例見られた。また「萌芽」に対する振り仮名は、「ほうが」6例「はうが」1例であった。

三四 泥母についてもおおむね並行的な現象が観察される。例えば、《嚢》や《農》は、『大綱鈔』はダ行のみで、『絵鈔』『俚諺抄』にもダ行が散見されるが、『国字辨』『国字解』ではナ行のみである。ただし、《南》は『大綱鈔』では「ダン」1回に対し「ナン」が2回現れるなど、明母のマ行よりは現れやすいようにも思われる。他の資料でも同様の傾向が認められるのかについての検討は今後の課題としたい。

三五 本稿では、一字に複数の音が対応する状態が解消され、一方の音に固定化していくことを、屋名池（二〇〇五）にならい「一元化」と称する。

三六 関連して、近世後期頃には「傍輩」を「朋輩」と表記した例が現れるが、『日本国語大辞典』では「当て字」とされており、オ段長音の開合の合流にくわえ、《傍》の清音形ホウが一般的でなくなったことによって安定性を獲得した表記と考えられる。その前提として、《朋》の清音形ホウが一般化していたことが想定されよう。

三七 この二語について、学会発表時のレジュメには『太平記』にも見られ、濁音の「ぼう」も土井本に裏付けられる」と記載した。しかし、そのような事実はなく、全くの誤認であった。ここに記して、お詫び申し上げます。

三八 『経典余師』訓読文・注釈文では、「朋友」の読みをボウユウとした例はなく、全てホウユウであった。

三九 本稿で扱った《萌》と似た例に〈まど〉を意味する《牖》がある。この字は、規範的には「イウ」という字音が期待されるが、中世における一般的な字体が、旁を「庸」に作る「牖」であったために、「ヨウ」が普及していた（高松一九九三）。しかし、現代では使用頻度が減ったために、慣用音の「ヨウ」は廃れ、現行の漢和辞典の多くは、規範的な「イウ」のみが示される状態となっており、その点で《萌》とは異なる帰結となっている。

【参考文献】

有坂秀世（一九四〇）「メイ（明）ネイ（寧）の類は果して漢音ならざるか」『音声学協会会報』六四、七～九頁

石山裕慈（二〇二一）「浄土三部経音義の漢字音」『訓点語と訓点資料』一四六輯、四八～六〇頁

伊藤智弘（二〇二〇）「『字鏡集』の字音掲載方針について」『訓点語と訓点資料』一四五輯、左三七～五九頁

江守賢治（一九八六）『解説字体辞典』三省堂

大島英之（二〇二二）『『色葉字平他』類の韻書における漢字音―大東急記

念文庫本・龍門文庫本を例に―」『日本語学論集』一八号、二三六(1)～二一一(26)頁
岡本　勲（一九六九）「バ・ダ行音の前の鼻音的要素は上代中古に遡り得るか―漢音に於ける明母泥母の音価よりの推定―」『国語国文』三八巻五号、三一～四三頁
小倉　肇（一九九五）『日本呉音の研究』新典社
小林芳規（一九六七）『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』東京大学出版会
小林芳規（二〇〇四）『角筆文献研究導論　中巻　日本国内篇（上）』汲古書院
斎木正直（二〇一二）「HNG の利用を通して見た親鸞・明恵の字体」『漢字字体史研究』勉誠出版、三六七～三七八頁
佐々木勇（二〇〇九）『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』汲古書院
佐々木勇（二〇一二）「親鸞使用の声点加点形式について―坂東本『教行信証』声点の位置づけ―」『訓点語と訓点資料』一二九輯、一～一八頁
鈴木俊幸（二〇〇七）『江戸の読書熱　自学する読者と書籍流通』平凡社
鈴木功眞（二〇二二）「近世前期開版倭玉篇の諸本に就いて―四百七十七部首系諸本―」『中部日本・日本語学研究論集』和泉書院、八七(422)～一〇六(402)頁
関場　武（二〇〇六）「「四書字引」とその周辺」『藝文研究』九一巻一号、二七二(1)～二四〇(33)頁
高田時雄（一九八八）『敦煌資料による中國語史の研究』創文社
高松政雄（一九九三）「日本漢字音の音形―韻母論（一）―」『日本文芸研究』四五巻二号、一～二〇頁
築島　裕（一九六七）『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究　研究篇』東京大学出版会
築島　裕（一九八六）「高山寺蔵大毗盧遮那成佛經疏永保點解説」『高山寺古訓点資料第三』東京大学出版会、三～二二頁
築島　裕（二〇〇八）「国語史学より見た弘法大師」『弘法大師墨蹟聚集　論文篇』弘法大師墨蹟聚集刊行会、三二三～三三八頁
長坂成行（二〇〇八）『伝存太平記写本総覧』和泉書院
中澤信幸（二〇一三）『中近世日本における韻書受容の研究』おうふう
日東寺慶治（一九九四）「太平記整版の研究」『太平記とその周辺』新典社、四七三～五〇〇頁
平山久雄（一九九三）「中国語における音韻変化規則の例外―それを生み出す諸原因について―」『東方学』八五、一四〇(1)～一二七(14)頁
平山久雄（二〇二二）『中古音講義』汲古書院
松井利彦（一九七一）「近世漢学における漢字音の位相」『国語国文』四〇巻五号、一～三三頁
松井利彦（一九八六）「明治初期漢語辞書の系譜」『国語史学の為に　第二部　古辞書』笠間書院、六三七～七一六頁
水野弥穂子（一九六五）「「正法眼蔵」の諸本その他について」『日本古典文学大系 81　正法眼蔵　正法眼蔵随聞記』三四～五六頁
屋名池誠（二〇〇五）「現代日本語の字音読み取りの機構を論じ、「漢字音の一元化」に及ぶ」『築島裕博士傘寿記念国語学論集』汲古書院、六七〇～六九二頁
山本嘉孝（二〇二一）「近世日本における『蒙求』の音声化―漢字音と連続性―」『古典は遺産か？ 日本文学におけるテクスト遺産の利用と再創造（アジア遊学 261）』勉誠出版、一四三～一五八頁
文化庁文化部国語課（一九九九）『明朝体活字字形一覧 1820～1946 年』大蔵省印刷局

【資料文献】

本稿で言及した文献に限定する。ただし、表1に示した漢和辞典類は全て省略した。また、影印本については出版社名と刊年のみを記した。なお、以下に挿入したリンクはいずれも二〇二四年一月三一日最終閲覧。

中国資料

切三：『十韻彙編』一九六三、臺灣学生書局
王二・王三：周祖謨（編）（一九八三）『唐五代韻書集存　上』中華書局
広韻：余廼永（校注）（二〇〇〇）『新校互註宋本広韻』上海辞書出版社
集韻：『集韻　附索引』一九八五、上海古籍出版社
宋本玉篇：宮内庁書陵部漢籍集覧公開画像〈https://db2.sido.keio.ac.jp/kanseki/bib_detail?bibid=043739〉
康熙字典：『王引之校改本康熙字典』一九九六、上海古籍出版社

一切経音義：【玄応音義】『古辞書音義集成 7～9』一九八〇～八一、汲古書院【慧琳音義】SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース
経典釈文：【抱経堂本】早稲田大学古典籍総合データベース公開画像〈https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ro12/ro12_00481/index.html〉【通志堂本】『語言文字学叢刊 経典釈文』一九七五、鼎文書局
干禄字書：杉本つとむ（一九七二）『漢字入門 『干禄字書』とその考察』早稲田大学出版部
五経字様・九経字様：『異体字研究資料集成 別巻1』一九七五、雄山閣出版
古俗字略・宋元以来俗字譜：『異体字研究資料集成 第二期8』一九九五、雄山閣出版

日本辞書・音義・近世以前漢字研究書

篆隷万象名義：『高山寺古辞書資料第一』一九七七、東京大学出版会
新撰字鏡（天治本）『新撰字鏡天治本 附 享和本・群書類従本』一九六七、臨川書店
法華経釈文（醍醐寺本）：『古辞書音義集成 4』一九七九、汲古書院
法華経音義：【九条家本法華経音】『法華経音』一九三六、古典保存会【保延本法華経単字】『法華経単字』一九三三、貴重図書影本刊行会【至徳版法華経音訓】『法華経音訓』一九三一、貴重図書影本刊行会
浄土三部経音義：【龍谷大学蔵本】龍谷蔵公開画像〈https://da.library.ryukoku.ac.jp/page/040023〉【珠光編】『勉誠社文庫30』一九七八、勉誠社
類聚名義抄（観智院本）：『新天理図書館善本叢書9～11』二〇一八、八木書店
色葉字類抄（前田本）：『尊経閣善本影印集成18』一九九九、八木書店
字鏡集：【天文本】『字鏡鈔天文本 影印篇』一九八二、勉誠社【永正本】『古辞書叢刊 字鏡抄 七帖』一九七四、雄松堂書店【応永本】『尊経閣善本影印集成21～23』一九九九～二〇〇一、八木書店
和玉篇（中世）：【音訓篇立】『古辞書音義集成15～16』一九八一、汲古書院【賢秀写本】宮内庁書陵部蔵複製本（複626）【夢梅本・篇目次第】『倭玉篇 夢梅本 篇目次第 研究並びに総合索引』一九七六、勉誠社【永禄本類字韻】原本調査【米沢本】米沢善本完全デジタルライブラリー公開画像〈https://www.library.yonezawa.yamagata.jp/dg/AA180.html〉【龍門文庫本】阪本龍門文庫善本電子画像集〈http://mahoroba.lib.nara-wu.ac.jp/aic/gdb/mahoroba/y05/html/172/〉【玉篇略】『古辞書叢刊 玉篇略 三冊』一九七六、雄松堂書店【伊勢家本】原本調査【玉篇要略集】『古辞書叢刊 和玉篇 一冊』一九七六、雄松堂書店【伝紹益本・静嘉堂文庫本】『静嘉堂文庫所蔵古辞書集成』一九八六、雄松堂フィルム出版【松井本類字韻】『増補古辞書叢刊 類字韻（附）初字通韻』一九七八、雄松堂書店【長享本】東京大学国語研究室蔵影写本（原本調査）【拾篇目集】国会図書館デジタルコレクション公開画像〈https://dl.ndl.go.jp/pid/2606285〉【弘治二年本】『増補古辞書叢刊 倭玉篇 三冊』一九七八、雄松堂書店
色葉字平他類の韻書：【天正十六本・祐徳稲荷神社本】『古辞書研究資料叢刊三』一九九五、大空社【龍門文庫本】『龍門文庫善本叢刊3』一九八五、勉誠社【新韻集】『新韻集』一九四四、日本古典全集刊行會【明応十年本】『大東急記念文庫善本叢刊 中古中世編 一四』二〇一六、汲古書院
古本節用集：【文明本】国立国会図書館デジタルコレクション公開画像〈https://dl.ndl.go.jp/pid/1286982/1/1〉【伊京集・明応五年本・易林本】『改訂新版 古本節用集六種研究並びに総合索引』一九七九、勉誠社
運歩色葉集：【元亀二年本】京都大学貴重資料デジタルアーカイブ公開画像〈https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00013243〉【静嘉堂文庫】『中世古辞書四種研究並びに総合索引』一九七一、風間書房
落葉集：小島幸枝（編）（一九七八）『耶蘇会板落葉集総索引』笠間書院
日葡辞書：土井忠生・森田武・長南実（編訳）（一九八〇）『邦訳日葡辞書』岩波書店
大広益会玉篇（寛永八年版）：東京大学総合図書館蔵本（D40:176，原本調査）
増続大広益会玉篇大全：【元禄五年版】東京大学総合図書館蔵本（D40:732，原本調査）【享保二十年版】同館蔵本（D40:743，原本調査）【安永九年版】同館蔵本（D40:737）【明治十年版】同館蔵本（D40:950，原本調査）
字集便覧：東京大学総合図書館蔵本（D40:48，原本調査）
字彙（寛文十一年版）：東京大学総合図書館蔵本（D40:315，原本調査）
四書画引：米谷隆史（二〇一六）「〈資料紹介〉元禄六年刊『四書画引』」『国語文字史の研究 一五』和泉書院、二〇七～二三二頁

大成四書字引：早稲田大学図書館古典籍総合データベース公開画像〈https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko31/bunko31_e0868/index.html〉
増益四書字引大成：東京大学総合図書館蔵本（B60:1947，原本調査）
経典熟字弁四書之部：広島大学図書館教科書コレクション画像データベース〈https://dc.lib.hiroshima-u.ac.jp/text/detail/4502014121010234?l=en〉
改正四書字引：国書データベース公開画像（江戸東京博物館蔵本）〈https://doi.org/10.20730/100414121〉
増補四書字引大成：国立公文書館デジタルアーカイブ公開画像〈https://www.digital.archives.go.jp/img/1214072〉
増補四書字引大全：国書データベース公開画像（東京学芸大学蔵本）〈https://doi.org/10.20730/100346985〉
和玉篇（近世）：【慶長十五年版】国立公文書館デジタルアーカイブ公開画像〈https://www.digital.archives.go.jp/img/4344982〉【慶長十八年版】国立国会図書館デジタルコレクション公開画像〈https://dl.ndl.go.jp/pid/2606799〉【寛永四年版真草倭玉篇】国立国会図書館蔵本（198-358，原本調査）
【それ以外】『江戸時代流通字引大集成（リール 62～67）』一九八八、雄松堂書店
真草二行節用集（寛文五年版）：国書データベース公開画像（筑波大学図書館蔵本）〈https://doi.org/10.20730/100334416〉
合類節用集：『合類節用集研究並びに索引』一九七九、勉誠社
書言字考節用集：『書言字考節用集研究並びに索引 影印篇』一九七三、風間書房
法華経随音句：『日遠著法華経随音句』一九七一、勉誠社
法華経音義補闕：『法華音義類聚 坤』一九七二、本満寺
磨光韻鏡：日本語史研究資料［国立国語研究所蔵］公開画像〈https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldl/bunken.php?title=makouinkyo〉
漢呉音図：日本語史研究資料［国立国語研究所蔵］公開画像〈https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldl/bunken.php?title=kangoonzu〉
漢語字類：『明治期漢語辞書大系 二』一九九五、大空社
布令必用新撰字引：『明治期漢語辞書大系 三』一九九五、大空社
新撰字類：『明治期漢語辞書大系 四』一九九五、大空社
漢語便覧：『明治期漢語辞書大系 四』一九九五、大空社
増補新令字解：『明治期漢語辞書大系 五』一九九五、大空社
大全漢語解：『明治期漢語辞書大系 六』一九九五、大空社
新撰字解：『明治期漢語辞書大系 六』一九九五、大空社
布令必携新聞字引：国立国会図書館デジタルコレクション公開画像〈https://dl.ndl.go.jp/pid/1085283/1/1〉
漢語類苑大成：『明治期漢語辞書大系 九』一九九五、大空社
世界節用無尽蔵：『明治期漢語辞書大系 八』一九九五、大空社
漢語二重字引：『明治期漢語辞書大系 八』一九九五、大空社
和英語林集成（三版）：明治学院大学和英語林集成デジタルアーカイブス公開画像〈https://mgda.meijigakuin.ac.jp/waei〉
漢英対照いろは辞典：『明治期国語辞書大系 普2』一九九七、大空社
日本辞書言海：『明治期国語辞書大系 普5』一九九八、大空社
日本大辞書：『明治期国語辞書大系 普6』一九九八、大空社
大言海：『新編 大言海』一九八二、冨山房
隋唐音図：『勉誠社文庫42』一九七八、勉誠社

訓点資料・漢文注釈書

大日経疏（高山寺本）：『高山寺古訓点資料三』一九八六、東京大学出版会
仮名書き法華経：【足利本】『足利本仮名書法華経 影印篇』一九七四、勉誠社【妙一記念館本】『妙一記念館本仮名書き法華経 影印篇 上下』一九八八、霊友会【校成図書館蔵本】田島毓堂（編）（一九九八）『校成図書館蔵法華経和歌付き仮名書き法華経の研究 影印篇』右文書院
教行信証（板東本）：『増補親鸞聖人真蹟集成 一・二』二〇〇五、法蔵館
大慈恩寺三蔵法師伝：【興福寺本】築島裕（一九六五）『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究 訳文篇』東京大学出版会【人文研本】東方學デジタル圖書館公開画像〈http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/M005menu.html〉
大唐西域記（人文研本）：東方學デジタル圖書館公開画像〈http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/M002menu.html〉
南海寄帰内法伝（石山寺旧蔵本）：『天理図書館善本叢書漢籍之部 5』一九八〇、八木書店
孟子：【書陵部蔵集註本】宮内庁書陵部蔵収蔵漢籍集覧公開画像〈https://db2.sido.keio.ac.jp/kanseki/bib_detail?bibid=007256〉【斯道文庫蔵広隆寺本】

原本調査〈092/卜18/5〉【京都大学附属図書館蔵宣賢加点本】京都大学貴重資料デジタルアーカイブ公開画像〈https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00007927〉【東洋文庫蔵有注本】岩崎文庫善本画像データベース公開画像〈http://124.33.215.236/zenpon/zenpon_read.php?FolderName=1-C-30&TargetPage=1&year=〉【東洋文庫無注永禄十年写本】岩崎文庫善本画像データベース公開画像〈http://124.33.215.236/zenpon/zenpon_read.php?FolderName=1-C-31&TargetPage=1&year=〉【龍谷大学蔵集註大全】龍谷蔵公開画像〈https://da.library.ryukoku.ac.jp/page/040007〉
史記（高山寺本）：『高山寺古訓点資料第一』一九八〇、東京大学出版会
漢書楊雄伝（国宝岩崎本）：e国宝公開画像〈https://emuseum.nich.go.jp/detail?langId=ja&webView=&content_base_id=101356〉
臣軌（書陵部本）：宮内庁書陵部蔵収蔵漢籍集覧公開画像〈https://db2.sido.keio.ac.jp/kanseki/bib_detail?bibid=007701〉
六韜：【陽明文庫蔵天文写本】国文学研究資料館マイクロフィルム（55-900-5）【慶應大学蔵室町後期写本】慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション公開画像〈https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/kanseki/110x-188-2-1〉【京都大学附属図書館蔵業賢筆本】京都大学貴重資料デジタルアーカイブ公開画像〈https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00007933〉【斯道文庫蔵天正十二年写本】原本調査（091/卜418/2）【斯道文庫蔵室町時代写本】原本調査（091/卜83/1）【斯道文庫蔵首欠本】原本調査（091/卜402/2）
三略（知恩院本）：小林（一九六七）
蒙求（標題本）：【長承本】『長承本 蒙求』一九九〇、汲古書院【正倉院本】『蒙求』一九二九、竹柏会【東洋文庫本】『蒙求古註集成上』一九八八、汲古書院【建保本】佐々木（二〇〇九）資料編【康永本】佐々木（二〇〇九）資料編【龍谷大学本】龍谷蔵公開画像〈https://da.library.ryukoku.ac.jp/page/110018〉
蒙求（有注本）：【故宮博物館本】池田利夫（編）（一九八八）『蒙求古註集成 上』汲古書院【応安刊本】国会図書館デジタルコレクション公開画像〈https://dl.ndl.go.jp/pid/2532117/1/1〉【大永五年本】国会図書館デジタルコレクション公開画像〈https://dl.ndl.go.jp/pid/2544960/1/1〉（角筆は原本調査）【南葵文庫本】東京大学附属図書館コレクション公開画像〈https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/nanki/document/85cb3974-0edf-2fc9-6214-9874842215〉【内閣文庫本】国立公文書館デジタルアーカイブ公開画像〈https://www.digital.archives.go.jp/img/3336522〉【京都大学附属図書館蔵天正八年本】京都大学貴重資料デジタルアーカイブ公開画像〈https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00013315〉【京都大学附属図書館蔵徐注本】京都大学貴重資料デジタルアーカイブ公開画像〈https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00007932〉
五行大義（穂久邇文庫本）：『古典研究会叢書漢籍之部七～八』一九八九～九〇、汲古書院
群書治要（書陵部本）：宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧公開画像〈https://db2.sido.keio.ac.jp/kanseki/bib_detail?bibid=069336〉
老子道徳経：【応安本】e国宝公開画像〈https://emuseum.nich.go.jp/detail?content_base_id=100400〉【至徳本】宮内庁書陵部蔵収蔵漢籍集覧公開画像〈https://db2.sido.keio.ac.jp/kanseki/bib_detail?bibid=007306〉
文選：【管見記紙背巻二】山崎誠（一九八四）「文選巻二宮内庁書陵部蔵「管見記」紙背影印・翻刻並に解説」『鎌倉時代語研究7』武蔵野書院【天理本巻二十六】『天理図書館善本叢書漢籍之部2』一九八〇、八木書店【猿投神社蔵正安頃加点本】小林芳規（一九六〇～一九六二）「猿投神社蔵正安本文選（一）～（四）」『訓点語と訓点資料』一四、一六、一八、二一
白氏文集：【嘉禎本】『金沢文庫本白氏文集 巻五十四 六十二 六十三 六十五 六十八 附四』一九八四、勉誠社【正応本】『天理図書館善本叢書漢籍之部二』一九八〇、八木書店【正和本】京都大学貴重資料デジタルアーカイブ公開画像〈https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00013492〉【猿投神社蔵文和二年本】国文学研究資料館マイクロフィルム（58-2-3）
管見抄：国立公文書館デジタルアーカイブ公開画像〈https://www.digital.archives.go.jp/img/2545172〉
三教指帰：【天理本】太田次男（一九八九）「聾瞽指帰と三教指帰―付・天理図書館蔵仁平四年写本の翻字―」『成田山仏教研究所紀要』一二、六九～九四【仁和寺本】築島裕・小林芳規・沼本克明・花野憲道・月本雅幸・松本光隆・山本真吾（一九九六）「仁和寺宝蔵三教指帰古点釈文」『訓点語と訓点資料』九七【光明院本】高野山アーカイブ公開画像〈https://archives.koyasan-u.ac.jp/view/resource/210001/〉【龍門文庫本】阪本龍門文庫電子画像集公開画像〈https://www.nara-wu.ac.jp/aic/gdb/mahoroba/

y05/html/274/〉
三教指帰注集：『三教指帰注集』一九九二、大谷大学
文鏡秘府論：【書陵部本】『文鏡秘府論』一九三〇、東方文化叢書【成簀堂文庫本】『文鏡秘府論』一九三五、古典保存会
秘密曼荼羅十住心論（高山寺本）：『高山寺古訓点資料第四』二〇〇三、東京大学出版会
秘蔵宝鑰：【西教寺本】曾田文雄・岸岡民子（一九七〇）「西教寺本秘蔵宝鑰併解読文（上）」『訓点語と訓点資料』四二【国語研究室本】『東京大学国語研究室資料叢書一六 古訓点資料集二』一九八六、汲古書院【真福寺本】国書データベース公開画像〈https://doi.org/10.20730/100115929〉
本朝文粋（久遠寺本）：『重要文化財 本朝文粋 上下』一九八〇、汲古書院
管蠡抄：【金沢文庫本】納富常夫（一九七三）「金沢貞顕筆「管蠡抄」」『金沢文庫研究』一九（九・一〇）【国会図書館本】国立国会図書館デジタルコレクション公開画像〈https://dl.ndl.go.jp/pid/2606110〉
法華和字解：国書データベース公開画像（国文学研究資料館蔵本）〈https://doi.org/10.20730/200010041〉
蒙求標題大綱鈔：「叡智の杜 Web」公開画像（宮城県図書館蔵天和三年刊本）〈https://eichi.library.pref.miyagi.jp/da/detail?data_id=040-50970-1-p1〉
故事俚諺絵鈔：東京大学総合図書館蔵元禄三年刊本（H30:400，原本調査）
蒙求標題俚諺鈔：国書データベース公開画像（一橋大学附属図書館青木文庫蔵宝永三年刊本）〈https://doi.org/10.20730/100338569〉
新刻蒙求国字辨：東京都立中央図書館加賀文庫蔵安永六年刊本（加〇二〇四三，原本調査）
補註蒙求国字解：東京大学総合図書館蔵寛政元年補闕刊本（H30:399，原本調査）
蒙求図会：高知県立高知城歴史博物館山内文庫蔵享和元年刊本（国書データベース公開画像）〈https://doi.org/10.20730/100141387〉
四書示蒙句解：内閣文庫蔵享保四年刊本（国立公文書館デジタルアーカイブ公開画像）〈https://www.digital.archives.go.jp/img/3957080〉
近思録示蒙句解：関西大学蔵本（関西大学東アジアデジタルアーカイブ公開画像）〈https://www.iiif.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/books/210185228〉
経典余師四書之部：【初版】内閣文庫蔵天明六年刊本（国立公文書館デジタルアーカイブ公開画像）〈https://www.digital.archives.go.jp/img/413660
1〉【三版】高知県立高知城歴史博物館山内文庫蔵文政七年刊本（国書データベース公開画像）〈https://doi.org/10.20730/100231231〉【五版】国立国会図書館蔵嘉永五年刊本（国会図書館デジタルコレクション公開画像）〈https://dl.ndl.go.jp/pid/2557018〉
経典余師近思録之部：内閣文庫蔵天保十四年刊本（国立公文書館デジタルアーカイブ公開画像）〈https://www.digital.archives.go.jp/img/4272581〉
訓蒙蒙求国字解：国立国会図書館蔵本（国立国会図書館デジタルコレクション公開画像）〈https://dl.ndl.go.jp/pid/777359〉
塚本哲三（編）（一九二七）『漢文叢書 四書全』有朋堂書店
塚本哲三（編）（一九二八）『漢文叢書 蒙求全』有朋堂書店
塚本哲三（編）（一九二八）『漢文叢書 近思録全・伝習録全』有朋堂書店
内野熊一郎（一九六二）『新釈漢文大系 孟子』明治書院
早川光三郎（一九七三）『新釈漢文大系 蒙求（上）』明治書院
市川安司（一九七五）『新釈漢文大系 近思録』明治書院

非漢文資料

源氏奥入：『奥入 大橋家本』一九七一、日本古典文学刊行会
尊号真像銘文（広本・略本）：『増補親鸞聖人真蹟集成四』二〇〇六、法蔵館
平家物語（延慶本）：『大東急記念文庫善本叢刊 中古中世編 別巻一』二〇〇六～二〇〇八、汲古書院
山水経：【真筆本】『永平正法眼蔵蒐書大成別巻』一九八〇、大修館書店
正法眼蔵：【乾坤院本】『永平正法眼蔵蒐書大成1』一九七八、大修館書店【秘蜜寺本】『永平正法眼蔵蒐書大成1』一九七八、大修館書店【正法眼蔵】『永平正法眼蔵蒐書大成1』一九七八、大修館書店【長円寺本】『永平正法眼蔵蒐書大成4』一九七九、大修館書店【瑠璃光寺本】『永平正法眼蔵蒐書大成5』一九七八、大修館書店
正法眼蔵抄：【泉福寺本】『永平正法眼蔵蒐書大成12』一九七四、大修館書店
神皇正統記：【白山本】『神皇正統記 一～四』一九三三、三秀舎【猪熊本】國學院大学デジタルライブラリー公開画像〈https://opac.kokugakuin.ac.jp/library/lime/jimnoshoto77-3/pages/page001.html〉【六地蔵寺本】『六地蔵寺本神皇正統記』一九九七、汲古書院【青蓮院本・享禄本】『天理図書

館善本叢書一九 神皇正統記諸本集』一九七五、八木書店【龍門文庫本】阪本龍門文庫電子画像集公開画像〈https://www.nara-wu.ac.jp/aic/gdb/mahoroba/y05/html/108〉【只見本】『神皇正統記只見本 カラー影印・簡訳・解説』二〇二〇、福島県只見町教育委員会【書陵部本】宮内庁書陵部蔵紙焼写真（複57）【慶安二年版本】国書データベース公開画像〈https://doi.org/10.20730/200008379〉（国文学研究資料館蔵本）【評註校訂神皇正統記】国書データベース公開画像（国文学研究資料館蔵本）〈https://doi.org/10.20730/200000343〉

太平記（古態本）:【神田本】『神田本太平記』一九七二、汲古書院【西源院本】『西源院本太平記 一～三』二〇〇五、クレス出版【神宮徴古館本】国文学研究資料館紙焼写真（E1996）【玄玖本】『玄玖本太平記 一～五』一九七三～七五、勉誠社【篠田本】国立国会図書館デジタルコレクション公開画像〈https://dl.ndl.go.jp/pid/2608576〉【筑波大学本】国書データベース公開画像〈https://doi.org/10.20730/100000645〉【南都本】国文学研究資料館紙焼写真（E612）【今川家本】国文学研究資料館紙焼写真（E2911）【米沢本】米沢善本完全デジタルライブラリー公開画像〈https://www.library.yonezawa.yamagata.jp/dg/AA198.html〉【毛利家本】国文学研究資料館紙焼写真（E611）【益田本】國學院大学図書館デジタルライブラリー公開画像〈https://opac.kokugakuin.ac.jp/digital/diglib/taiheiki2648-1/mag1/pages/page001.html〉【前田家本】東京大学史料編纂所蔵謄写本（請求記号二〇四〇.四-四〇）【神宮文庫本】国文学研究資料館マイクロフィルム（34-339-2）【梵舜本】『太平記 梵舜本 一～九』一九六五～六七、古典文庫【天正本】国文学研究資料館紙焼写真（E1436）【教運本】国立国会図書館デジタルコレクション公開画像〈https://dl.ndl.go.jp/pid/2605258〉【野尻本】国立公文書館デジタルアーカイブ公開画像〈https://www.digital.archives.go.jp/img/1213170〉【京大本】小秋元段ほか（編）（二〇一一）『校訂京大本太平記 上下』勉誠出版【日置本】『中京大学図書館蔵 太平記 一～四』一九九〇、新典社

太平記（流布本）:【土井本】西端幸雄・志甫由紀恵（編）（一九九七）『土井本『太平記』本文と語彙データ』勉誠社【河野美術館四十二冊本】国文学研究資料館マイクロフィルム（73-196-2）【元和八年版】国立公文書館デジタルアーカイブ公開画像（内閣文庫蔵本）〈https://www.digital.archives.go.jp/img/3962726〉【寛文四年版】東京大学総合図書館蔵本（E23:151 原本調査）【寛文十一年版】国書データベース公開画像〈国文学研究資料館蔵本）〈https://doi.org/10.20730/200008369〉【延宝八年版】国書データベース公開画像（韓国国立中央図書館蔵本）〈https://doi.org/10.20730/100220940〉【元禄十年版】東京大学総合図書館蔵本（E23:70 原本調査）【元禄十一年版】東京大学総合図書館蔵本（G24:734 原本調査）【享保七年版】東京大学総合図書館蔵本（E23:323 原本調査）

太閤記:【無刊記版】国立公文書館デジタルアーカイブ公開画像〈https://www.digital.archives.go.jp/img/4281786〉【正保三年版】国立国会図書館デジタルコレクション公開画像〈https://dl.ndl.go.jp/pid/2605994〉【寛文二年版】東京大学総合図書館蔵本（G24:392、原本調査）

謡曲「俊寛」:【光悦謡本】野上記念法政大学能楽研究所能楽貴重資料デジタルコレクション公開画像〈https://nohken.ws.hosei.ac.jp/nohken_material/htmls/index/pages/cate1/KT044.html〉【元和卯月本】国立国会図書館デジタルコレクション公開画像〈https://dl.ndl.go.jp/pid/1288029〉【明和改正本】観世アーカイブ公開画像〈http://gazo.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/kanzegazo/KmView/081/081002019/kmview.html〉【観世流大成版】『俊寛 廿一ノ二』一九七四、檜書店【現行宝生流謡本】『宝生流特製一番本 俊寛』二〇一五、わんや書店【現行金剛流謡本】『金剛流謡曲本 俊寛』檜書店【現行金春流謡本】『金春流謡曲百番集』一九九〇、金春円満井会出版部

謡抄（守清本）: 国立国会図書館デジタルコレクション公開画像〈https://dl.ndl.go.jp/pid/2606412〉

論語抄（応永本）:『応永二十七年本論語抄』一九七六、勉誠社

玉塵抄（国会本）: 国立国会図書館デジタルコレクション公開画像〈https://dl.ndl.go.jp/pid/2606749〉

当流謡百番仮名遣開合: 国文学研究資料館マイクロフィルム（242-70-6、京都女子大学吉沢文庫蔵本）

音曲玉淵集:『音曲玉淵集』一九七五、臨川書店

【索引・データベース】

上田正（一九八七）『慧琳反切総覧』汲古書院

北恭昭（編）（一九九四～九五）『倭玉篇五本和訓集成』汲古書院

周法高（一九六八）『玄応反切字表』崇基書店

當山日出夫（一九八八）『和漢朗詠集漢字索引』勉誠社

當山日出夫（一九八九）『新撰朗詠集漢字索引』勉誠社
藤井俊博（一九九七）『本朝文粋漢字索引』おうふう
J.C.〈ボン〉（著）・飛田良文・李漢燮（編集）（二〇〇一）『和英語林集成　初版再版三版対照総索引 第1～3巻』港の人
漢語大字典編輯委員會（二〇一〇）『漢語大字典 一～九（第二版）』四川出版集團・四川辭書出版社
曾良・陳敏（編）（二〇一八）『明清小説俗字典』廣陵書社
加藤大鶴・佐々木勇・石山裕慈・高田智和（二〇二二）「資料横断的な漢字音・漢語音データベース」https://www2.mmc.atomi.ac.jp/~katou/KanjionDB/index.html
鈴木慎吾（二〇〇三～二〇二三）「篇韻データベース」内「Web 韻圖～廣韻檢索～」『切韻』諸本輯覽」https://suzukish.sakura.ne.jp/search/
豊島正之（二〇一六～二〇二三）「日本近代辞書・字書集」https://joao-roiz.jp/JPDICT/
漢字字体規範史データセット保存会（二〇一九）「漢字字体規範史データセット単字検索」https://search.hng-data.org/
国文学研究資料館「日本古典文学大系本文データベース」http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/
国立国語研究所（二〇二二）「日本語歴史コーパス」（バージョン 2023.3，中納言バージョン 2.7.2）https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/
大蔵経テキストデータベース委員会「SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース」（2018 版）http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/
愛如生「中国基本古籍庫」（V7.0）http://server.wenzibase.com/
中央研究院・歴史語言研究所「漢籍電子文獻資料庫」https://hanchi.ihp.sinica.edu.tw/ihp/hanji.htm

【附記】

本調査において作成した用例のリストは、Google スプレッドシート〈https://docs.google.com/spreadsheets/d/14U_b6kyeBqbAq8eOwanLC5QI2yXWnemn_pNrzpwOT2Q/edit?usp=sharing〉で公開しております。

本稿は、二〇二二年一〇月一六日にオンラインで行われた「第一二七回訓点語学会研究発表会」における発表原稿に、加筆修正を行ったものです。学会での席上においては、多くの貴重な意見を賜りました。また、国立国会図書館、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫、宮内庁書陵部におかれましては、貴重な資料の閲覧を許可していただき、用例を充実させることができました。ここに記して、感謝いたします。

なお、本稿は JSPS 科研費 21J20167・22KJ0545 の助成を受けております。